

東西遊記序

石州別駕橋君以攻醫漫遊四方足跡殆遍天下其所記載皆修治之案經驗之方而政有嘉績則必咨焉人有卓行則必訪焉及登名山覽古蹟歷問殊俗搜采異聞者數十卷名曰東西遊記好事家往往傳誦之至有謄寫而藏以爲帳中之祕者書賈因屢請刻君弗肯久之一日俄語余曰此書之行非吾意也何者蓋家業著述猶未脫稿者居多而首用兔園冊災木恐致有識之誚而會坊間射利之徒有謀私刻於是不獲已遂授剞劂將奈之何盍爲吾書一言以辨於卷端余乃竊謂曰夫橋君爲人志於道勵

於行、旁好唐詩、及國風、考鐘律、試星度、其爲醫也、固亦隱乎小伎、爾而况此書就其中、特又緒餘者乎、然善讀是編者、可以興起感發、乘參之良心、則是遷元氣也、破井蛙之見、釋夏蟲之疑、則是起沈痼也、其醫人之效亦捷矣、不必事刀圭間、此豈與世之紀遊蔓詞、彌文、徒資風月之談、供觴咏之具而已者、可同日而語也哉。君其勿多讓焉。是爲序。

寬政乙卯歲秋八月

愚山松本慎

標註東遊記目錄

一之卷

- 一 鎌倉……………一頁 一 竹根化蟬……………三頁
- 一 十府之里……………四頁 一 吹浦砂磧 四山應瑞畫……………六頁
- 一 蘇武社……………九頁 一 埋木……………一頁
- 一 熊突山口素胸畫……………一二頁 一 言葉石……………一五頁
- 一 甲冑堂……………一七頁

二之卷

- 一 松前津波……………一九頁 一 寒氣落指……………二二頁
- 一 小杉之感南嶽畫……………二二頁 一 名立崩……………二六頁
- 一 米山……………二九頁 一 九九橋……………三〇頁
- 一 鹽竈……………三三頁

三之卷

- 一 文武之餘風……………三七頁 一 正木劔術長澤麻雪畫……………四〇頁

一 丹後之人……………四四頁 一 幸之神……………四五頁

一 辰氣樓 吉村蘭洲畫……………四六頁 一 佐渡之渡……………五〇頁

四 之 卷

一 親不知……………五五頁 一 義經之笈……………五七頁

一 胡沙吹 吳月溪畫……………六〇頁 一 藤樹先生……………六三頁

一 阿古屋松 圓山應受畫……………七〇頁

五 之 卷

一 秋田路……………七三頁 一 朱谷……………七四頁

一 化石溪……………七五頁 一 浮島 吉村孝敬畫……………七六頁

一 大骨……………八一頁 一 金華山 法眼東洋畫……………八三頁

一 七不思議……………八七頁

五 之 卷 末

一 平泉 淺井義篤畫……………九三頁 一 三尊窟村上 東洲畫……………九九頁

一 不食病……………一〇五頁

標註東遊記目錄終

標註東遊記後編目錄

一 之 卷

一 壺の石ふみ……………一〇九頁 一 燈語……………一一二頁

一 葡萄嶺雪に歩す……………一二三頁

二 之 卷

一 龍燈……………一三一頁 一 新潟……………一三一頁

一 三馬屋……………一三三頁 一 狐の義理……………一三五頁

一 駿河名……………一三八頁 一 三本木臺……………一三九頁

一 埋木……………一四一頁 一 龍鱗……………一四二頁

一 蚌珠……………一四三頁 一 養軒の詩……………一四五頁

三 之 卷

一 四五六谷……………一四九頁 一 齋藤五郎兵衛……………一五〇頁

一 北極星……………一五〇頁 一 登龍……………一五二頁

一 黃鐘調……………一五三頁 一 帚木……………一五七頁

一善光寺……………一五九頁 一諏訪湖……………一六三頁
一鶴岡慈悲……………一六五頁

四之卷

一熊野御前……………一六八頁 一羽州の鬼……………一六九頁
一松島……………一七三頁 一舞樂……………一八〇頁
一漢文帝……………一八二頁 一戸隠山……………一八三頁
一大魚……………一八四頁 一塔影……………一八六頁

五之卷

一手取川の風雪……………一八八頁 一床下の聲……………一九〇頁
一飛根の城跡……………一九一頁 一舍利濱……………一九三頁
一銅山……………一九七頁 一廣徳寺門……………一九八頁
一氣候……………二〇一頁 一名山論……………二〇三頁
一欽先……………二〇五頁 一地氣……………二〇八頁

標註東西遊記後編目錄終

標註東西遊記下篇

橘 南 谿 著述
平出古刀禰 標註

この巻を刊行するにつきて

さきに余、本書の上篇を世にいだしし後、引きつゞきて下篇をも刊行せんとせしに、挿繪の彫刻にいたく歲月を費ししと、業務の忙しかりしとにより、自ら等閑にうち過ぎしが、いつまでもこの稿本を篋底に留め置くも心ならず、去年の夏いささかの閑を得しまゝ、取り出して印刷に附することとせり、もとより數年前に成りしものなれば、今更に増補すべき所も多かるを、その暇なくして、そのまゝになしつ、今にして思へば、さきにこの書の首に附したる南谿小傳の中にも、誤謬と心づきたる所二三あり、例へば南谿東遊の順路の如きは、奥羽より北陸に入りたるやうに記ししも、本書養軒の詩の條に、奥羽より江戸に歸着せしよし見ゆれば、誤なるべく、また南谿朝に仕へて、尙樂に任せられしと記しし

は淺田惟常氏の皇國名醫傳の誤をうけたるにて次に掲ぐる家譜によるを正しとすべきが如し、この後またかゝる誤謬を見出づることもあるべし、そは版をかふることに訂すべけん、あなかしこ。

明治三十五年二月

標註者識

○内膳司史生橘氏家譜

春暉

寶曆三年四月二十一日	生
天明六年十二月二十日	爲内膳司史生三十四歳
同七年二月二十七日	叙正七位下三十五歳
同三年三月十三日	任石見介
寛政六年九月十六日	叙従六位下二十四歳
同八年四月四日	辭介四十四歳
同年五月十一日	落飾法名梅仙
文化三年四月十日	死五十三歳、法名南翁 院陽岳義明
春 徳春暉男	
安永八年八月三日	生
寛政八年二月十六日	叙正七位下二十八歳
同年三月二十五日	任豊後目
享和元年三月三十日	辭官返上位記

○西陽雜俎に云、
○未時名轉化、
○才草附樹根、
○曲、昔中樹根、
○見轉化、附樹根、
○怪之、村人因、
○木所化也、附樹、
○一木あり、附樹、
○彌木あり、附樹、
○話に似たり、

○長濱 今の近江
の長濱町なり

○十府の里 所在
の利府其地なり
○東、松崎、堂の遊
○都、今、利府、日
○出、管、十、府、蓋、十
○經、管、十、府、蓋、十

○原の町 陸前國
宮城郡に属し、仙
臺を距ること二里
半許

○久間洞 老志
て享保四年頃、
○明、治、久、間、洞、刊、行、
○伊、彦、四、郎、仙、臺、侯、
○遊、佐、木、宮、に、仕、學、を、
○受、け、た、元、禄、中、多、
○賀、城、の、碑、を、土、芥、の、
○中、より、獲、り、世、に、傳、
○ふ、元、文、十、四、年、二、月、
○十一、日、八、十、四、歳、に、
○て、歿、す、洞、巖、の、子、
○故、方、あり、仙、臺、に、仕、

標註東遊記卷之壹

十府の里

四

とを憐れみ、又土に埋み蟬に化せしめられしとかや、珍らしさに、余も兎角して
ニツ三ツを求得て携へ歸れり、其中に背中より竹生ひ出たるも有り、京に歸り
て人に語るに、草の根の虫に變ずること多きもの也、竹の蟬に變ずるもある事
なりといへり、誠に冬は虫に成り、夏は草になるものも本草などにも見えぬれ
ば、是等も其類ひにてやあらん、されど時によりて無情の物有情に變じ、又有情
の無情に變ずるなど、常理の外なり、掌て竹の半變じて魚となりかゝりたるを
みしとあり、又近江の人の語りしは、長濱にて山の芋を堀來り、料理しけるに中
に釣針のありしとあり、其堀りし所昔は湖水の傍なりし所といへば、此薯蕷は
うなぎの變じたる事疑ひなしといへり、其物語りし人も眞實の人なりしが、い
かゝりしや。

十府の里

とふの里は、いにしへ菅ごもの出し地にて、奥州の名所なり、仙臺の北東の方一
二里の所に有、此あたりは玉田、横野、冠川、をたえの橋、多賀城、壺の石ふみ、鹽竈の
浦野田の玉川末の松山など名高き名所二三里の間に集りつとへり、五月八日

朝とく仙臺を出て、原の町といふ所へ出て、それより案内といふ所へ來り、道行
人に尋るに、知らずとのみ答ふ、此案内村には酒食の店も多く見ゆれば、立より
て尋るに、店に立まはる女どもの、豆腐はこなたにあり、湯豆腐もかげんよし、奥
へ入らせ給へといふに、どうふにはあらず、尋るはとふの里の事なりといへ
ども、其豆腐は御望に參らすべし、先入らせ給へど、口々にのしる、養軒と顔見
合て、扱も所には住ぬれど、無下に心なき賤の女かなと笑ふ、すべて此十府に限
らず、何れの國にても、其所の人に名所古跡を尋るに、よくしりてをしふる人は
稀なり、能々心かけてせつゝ、尋求めざれば、行過て見残したる地多し、殊に殘
念なりしは、東の壺の石ふみなり、さざれば、何事も筆まめやかに書付たる書物
杯あるは、世の人の大なるちから也、此國などは、名所も多き國なれば、書集たる
書などは、無きとにやと尋ねしに、仙臺の家中に、觀跡、聞老志といへる書あり、卷
數十斗にも餘りて、奥羽兩國の名所古跡、古事、古歌に至るまで、委敷書し書なり、
作者は仙臺の人にて、佐久間洞巖とて、享保時分の人也、名を義和字を子巖、太白
山人と號し、徂徠などの知音也、其子は今の仙臺の儒官にて、姓を新井と改め、彦
四郎と稱す、名を義質、字を子敬、滄洲と號し、齡既に七十斗也、右の書、寫本なるが

標註東遊記卷之壹

十府の里

五

へすして京都に教
授す、義實は妾腹
の子なり
○義實 先哲遺談
後編卷四に云、義
實字子敬、能治洲、
通稱市郎、能治洲
家、復三新井氏一別
家、復三新井氏一別
受三三二百石、其
家至今能出二文
學之稱士一焉云
○奥田直助 後の
埋木の條に注せり

○酒田 羽後國
○吹浦 同國同
郡に屬す、酒田よ
り五里
○島山 同國
同郡に屬し、由利郡
に跨る、直立六千
四、百六十餘尺、吹
浦より九里なり

ゆゑ彼國にさへ多からず、他邦には書の名をたに聞知れる人なし、予は仙臺の士、吹田直助といふ人の家にて一見しつるに、主人いへるは過し、年京都の白木屋彦太郎方へも一部書寫して贈れりと、何と予世に弘めたき書也、彼十府の里はよくく尋るに案内村と鹽竈との間にて街道より左に入る所に、其古跡あり、菅薦も今は名のみのこれり。

吹浦砂磧

三月廿二日、出羽國酒田を朝とく起出て、吹浦といふ里を心さし行く、其間六里にして、路傍に人家なく、又田畑も見えず、左は大海、右は鳥海山にて、過る所は渺々たる沙場なれば、道路もさたかならず、此邊の人だに迷ふ故にや、其間三五十間程、柱を建て、道の目印とせり、酒田より一二里も來ぬらんと思ふ頃、北風強く吹起り、沙の飛散る事おびたいし、初の程は彼印をたよりとし、又は人馬の足跡あるひは草鞋馬の沓などのある方へ道をいそぎしか、次第に風吹つゝのりて、沙を吹起すに、天地も眞黒に成り、目當の柱の見えざるのみか、我うしろに従ひ來る養軒さへ見えわかねば、互に聲を合せ手を携へて行程に、後に



應瑞



○南時詩集に云
 爲三浦浦砂磧
 加始梅野交遠去
 千里湖天連白雪
 丙夜猶聞雁淚來
 願春未見花只落
 華然一舉到三京

陰風動地來、明
 君利沙長城卒、
 日暮草飛城西、
 傳白草、國、山、
 多、葉、國、山、
 胡、葉、國、山、
 支、葉、國、山、
 風、葉、國、山、
 王、葉、國、山、
 白、葉、國、山、
 師、葉、國、山、
 絶、葉、國、山、

○男鹿山今所
 鹿島に蘇秋
 鹿島に蘇秋
 鹿島に蘇秋
 鹿島に蘇秋
 鹿島に蘇秋
 鹿島に蘇秋
 鹿島に蘇秋
 鹿島に蘇秋
 鹿島に蘇秋
 鹿島に蘇秋

標註東遊記卷之壹

吹浦砂磧

は前後をだにわきまへず、もとより路を尋人も無く、心もそらにまどひてせ
 んかたなきまゝ、能々思ふにかくみだりに行迷ひなば、いかなる所にか迷ひ至
 らんもはかりがたし、されば心をしづめ砂上に安座して、いつまでなりとも風
 沙のをささるまで、此所を動かじなせといひつれども、又とやかくするうち夜に
 も入りなば、いかせんとおもひめぐらせは心安からず、とやせんかくやわら
 んどたゝすみ居たるに午過る頃より小雨降出たり、雨のしめりに砂しづまり、
 印の柱も見え出たり、嬉しき事限り無し、されども風猶やまされは笠も何方へ
 か吹散りぬ、雨は横さまにふり、合羽は頭より上に舞上り、惣身ひたぬれにぬれ
 て、其らくつらき事いひもつくすべからず、されど沙しづまりしゆゑ路にも迷
 はず、只急ぎにいそぐ程に、申の刻ばかりに吹浦へ着ぬ、惣じて此所のみに限ら
 す、越後出羽の二ヶ國は街道北海にはどりして、百六七十里か間は一日も沙原
 を通らざるとなし、歩行するにも足首迄は常に沙に埋れず、ゆゑも只退くや
 うにのみ思はれ、道はかどらぬ越の長濱とよみしもおもひ出られぬ、殊に九月
 の頃より三月末までは、日として風吹ざるともなく、沙塵常に天を覆ふ、唐詩に
 いへる北風動地とは、かゝる景色ならん、其吹ちらす沙風の吹廻しによりて所

々に吹たまり、或は堤のとく、塚のとく、日々に其形變ず、其上北地の草木は皆秋
 の末より春の末までは青き葉は無く、渺々たる沙漠に白草の風に動く、棘かの
 塞外沙漠の事作れる詩にいふ所に、少しも違はず、げに北極地を出ると四十度
 にあまりて、塞北の地にひとしければ、かゝる風色の相似たるも怪しむにたら
 ず、日本のうちにかゝる所ありとは聞も及さりしが、昔より北地に遊ふ人は皆
 夏ばかりなれば、草木も青み渡り、風も南風に替り、海づらものぞかなれば、恐ろ
 しき名にも立ざる事と覺ゆ、我北地に至りしは九月より三月の頃なれば、途中
 にて旅人には絶て逢事なかりし、我旅行は醫術修行の爲なれば、格別の事也、只
 名所をのみ探らんと、の心にて行人は、必四月以後に行べき國也。

蘇武社

出羽國秋田の城下より北東に海中へさし出たる地あり、遠く望めば島山のご
 とし、是を男鹿山といふ、塚の住吉の浦より淡路島を望むがごとく、此地は同し
 出羽國にても格別の地にて、種々産物も多く出る中に、材木の内、殊更杉の木多
 く、世上に秋田杉といふは、此山より出るをいふ、風景も他に異にして、其中に嵩

○奥田直輔 字は長編、号は仙臺の盛喜の子、文藝の商家に生れ、武の道に精しく、後井平洲、中井竹言、井上明、細等子、交る、中井竹亭、和二年、教授、の墓、和二年、八月、十六日、石志、見、は、仙臺、金、石、志

○海松 「うみま つしなり」

○木理 「しくめ」 のこみ

○扶桑木 四遊記 續編卷二に見ゆ

直輔といへる人あり、家富て文字に長じ、且仁慈の心深ければ、多くの金銀を出して井手の川なごを堀り、民を賑はし、又は堤を築き、橋を渡しなご、いろく人民の助けになるとのみをなして、鹽竈邊などには新渠の碑なご、嚴然として皆人の知る所なり、此奥田氏名取川の堤を治めて、田作の水難を防し、川の底より地深く堀出せし木あり、手に親しかりければ、携へ來りて、是名取川の埋木てふものにて、もや、君に贈る也とて出せるを見るに、實に前に見しものには異にして、數千年を経にける木と見え、其性は何ともしれねども、色黒く、是を磨けば光澤有りて、唐木杯のやうにそ見ゆ、石炭、海松などとは格別にして、木理あさやかにして、誠に是やむかしよりいひ傳へぬる埋木なるべしとおもはる、いと珍敷嬉しくて、例の腰折なごよみて謝しつゝ、囊に取納めて持歸り、手づから小さき香箱に造りて、常に左右に置き、昔の事思ひ出て、我家の寶の一ツとせり、過し西遊の時に得歸りし扶桑木に似て、彼木にも劣らすを覺ゆ。

熊突

加賀越中は世に名高き熊多き所也、熊膽なども此邊より出るを極上の品と定

素絢画



開山 能登守
不教經のこ
○甲賀堂 觀迹聞
老志卷四に云古
將堂 破殿坂東有
一身 中區一女影
鳥羽子 右方執弓
失 左方旗刀劍相
傳所 祭田村廣野鹿
神女也 有寺曰遊
王山 高福寺如
今所 祭二女 佐藤
大信 忠信之婦也
俱 兩婦于別姑 兒
時 兩婦嬰疾 男
姑 愛之 祈之 靈
病 忽癒 後人感生
前 純孝 貞淑 建二
女廟 以爲 胎護神
觀其 影也

めしどろ其頃の人も二人の婦人の孝心あはれに思ひしにや其姿を木像に刻みて残し置しど也嗚呼兄弟の人は古今ためしすくなき忠義武勇の士也其人につれそひし婦人又希代の孝女にて夫婦忠孝の勝れしも世に珍らしき事なり余此物語を聞此像を拜するにそるに落涙せりかくばかり人の鑑ともなるへき孝婦の像のかくわれはてたる小堂の雨風をだに防ぎかねて彩色も落し失せ僧だに守らで香花を供する人も無く年月に荒れ行きつひには跡かたもなくなりはて是等の事をも語り傳ふ人もなくならんを誰ありてあはれといひて一錢の參物をだに供する人も無きは世には忠孝に感ずる人のすくなきにやあまりにあはれに覺へしかば委敷書付歸れり

東遊記卷之一終

東遊記卷之二

松前比津波

奥州津輕領三馬屋といへる所は松前渡海の湊にて其間纔に七里を隔てたり。兩方の山々の鼻相臨める所は三四里斗にても遠すべし此三馬屋に逗留せし頃一夜此家の近きわたりの老人來りぬれば家内の祖父祖母杯打集り兩爐裏にまど居して四方山の物語せしに彼者共語りしは扱も此二三十年已前松前の津波程おそろしかりしことばあらずされど佛神はあらかじめよくしるしめして其告もありしかどおろかなる人間其時まで露しらすして海邊の者皆死うせしなり定て上み方にて聞及び玉ひてんと云膝すり寄りていかなる事にて有りしやと問ふに其頃風も靜に雨も遠かりしか只何となく空の氣色打くもりたるやうなりしに夜るく折々光り物して東西に虚空を飛行するものあり漸々に甚敷其四五日前に至れば白晝にもいろくの神々虚空を飛行し給ふ衣冠にて馬上に見ゆるもあり或は龍に乗り雲に乗り或は犀象のたぐひに打乗り白き裝束なるもあり赤き青き色々の出立にて其姿も亦大なる

○三馬屋は陸奥津輕郡にあり今別野を距るこ

もわり、小さきもわり、異類異形の佛神空中にみち／＼て、東西に飛行し玉ふ。我々も皆外へ出て、毎日／＼いと有難くをかみたり、不思議なる事にて、まのあたり拜み奉るとよど、四五日か程もいひくらすらちに、ある夕暮沖の方を見やりたるに、眞白にして雪の山のとさきもの遙に見ゆ。それ見よ、又ふしきなるもの、海中に出来たれといふうちに、だん／＼に近く寄り来りて、近く見えし島山の上を打越して来るを見るに、大浪の打来る也、すは津波こそ、はや遼よど、老若男女我さきにと逃迷ひしかど、しばしか間に打寄て、民屋、田畑、草木禽獸まで少しも残らず海底のみくづと成れば、生残る人民海邊の村里には、壺人もなし。我々も遙に見しに、其浪數千里の沖より来りて、其高さと雲のとく、磯近き迄は浪といふ事思ひもよらさりし也。されど只一ト寄せて直に引たり、いかなるゆゑといふ事しる人なし。扱こそ初に神々の雲中を飛行し給ひけるは、此大變ある事をしるしめして、此地を逃去り給ひしなるべしといひ合て、恐れ侍りぬと語りぬ。其座にありける四五十以上の老人は、皆まのあたり見覺えて、口々に語りぬ。此事にて思ひ合すれば、我友塘雨諸國行脚の時、石見の國にて、海邊を通りしに、海の底より潮卷上り來て、川上遙にゆり上り、懸り居し船など大に驚き、大變な

○北漢 北海のこ
魚、其名爲鯨

寒氣指を落す

りと騒きわひ、海嘯といふものならんや、杯いひたると語りし其年月、此頃に當れりすべて、北海邊は此時皆何方も海の底大に潮湧返りて、騒動せしど、何れの國にてもいひしなり。彼松前の波先きの櫻、北浪一面に動きしとみへたり、誠に希代の珍事なりき、又後世の心得にもなるべき事なり。

○脱疽 身体局部
の營養不及の爲め
腐敗に陥ること

○大葛村 北秋田
郡に屬す

北國の人餘りに寒氣をこらへ、雪を侵せば、血凍り氣のめぐり絶えて、春に到り少し暖氣を催す比、足の指皆紫色に變じて、やがて腐り落る也。いかに療治を加れども治しかたきもの也。余も此病人を度々見たりしかども、やはり脱疽の種類なるべし。いかに寒氣甚しければ、指の落る事やあらんと思ひすて、居たりしか、北地に嚴寒に遊びて、其まことなる事を知る人のみならず、畜類までも指の落る事あり。出羽國秋田領の内大葛村の鶏、ひと年寒氣強かりし冬庭に追放し置しに、其翌春に至り、鶏の足の指とく腐り落ぬ。鶏の命は恙なくて今に存在すれども、足の指無れば、枝に栖事ならず、只庭にのみうづくまり居る也。是も亦珍敷事といふべし。すべていかなる寒國といへども、指の落るといふ

は足の指の事なり、手の指の落るといふ事はあらず、我輩南國に生れて、かゝる寒氣は聞も及ばぬとなるを、明け暮れ雪の中を歩行するにて、幾度かかくて指も落べしとおもひしか、不思議に春に至りても恙無りしは、神明の冥助ともいふべし。足にははきとて、管にて編たるすね當のとき物を付け、足先きは足袋をはき、其上に爪掛とて、藁にて指先きを厚く包みて、其上に草鞋をはく事なり。身には幾重も合羽を着し、頭には頭巾の上に深き笠をさる。頭巾は冬より春に至り、一日もはなつ事なし。雪深く道の上三四尺以上も積りたる時は、爪先き濡れずして、反て凌やすし。雪纒に四五寸斗の時、雨風交りて道路泥田のときなる時は、腰までも濡れて、其爪先きたとへ幾重包みても、雪水しみ透りて、其つめたさ頭迄も徹り、只今も早足首は切れ失ぬべく予覺ゆる。横さまに降る雪吹にて頭中の間より眉ぬれて、其露眉毛に氷り付、眉毛の先き白くツラ、の如く下るとあり、夕ごとに宿屋に着ても草鞋脚絆其儘には解けず、彼地の者其足圍爐裏にくべ給へといふに、ぞ初の頃はあやしくをかしかりしかと、餘りに脚半のとけさるゆへに、教のこどくに任せて、いろりに足さしくべたるに、火のあつきを覺へずや、暫くして、漸々に氷解け水滴り出て、はじめて足袋草鞋ともにと

くべし。わらぢの氷り付て石のこどくになり、とけざる事は毎日かくのとし、北地にては珍敷とにはあらず。又餘りに氷りたる足を急に熱湯杯に浸せば、血のめぐり損じて、足とくく腐るといへり。只初はぬる湯にて洗ひ、漸々にあつき湯にて浸すをよしとするなり。

小杉の感

越中の小杉といふ所を過しは、十二月廿日頃にて北國のならい、降り積し雪に行べき途さへ覺束なきに、我輩二人古びたる雨合羽に同敷よされ破れたる脚絆打かけなぞして、破れ笠打かふひり、持もなれぬ荷物しどけ無く背負ひ、手足こゝえ、歩みかねたるさま、あはれにも見苦しくも、人目には全く乞食順禮なぞこそみえぬ。人里遠く行先きおほつかなき折しも、此邊の百姓と見えて、四十斗なる男紺の木綿のわた入の裾高くかゝげ、上に鏡を着し、山岡頭巾にくさげに打かふりて、行過るあるを呼かけ、小杉への道おしへてたべといふに、我も其方へ行者なり、跡に付て來り給へど、足早に行跡に従ひ、壹里斗も行程に、彼男いふやう、旅の人はいづくよりいづくへ越し給ふや、又何の用にか出給ふ。余答へて

○小杉は越中國
山より三里中
○我輩二人南嶺
さ門人蓋軒さなり

我々は都がたの醫者なるが富山の方へ志てまかる也といへば富山は此所より程近し彼地に逗留もし給はんやと問に予品よくばし足をも留べしと答るに彼男いふ此さむ空にさず難義に思ひ給ふべしされど人はしんぼうこそ肝要なりそこたちも深くわんじ入らずとも富山に足を留め給へ富山は繁昌の地なれば程なく有り付も出来ぬへし過し年支格といへる醫者都方より富山へ來り給ひしが此人しんぼうも強く醫者も上手にて其家業大に行れ其上近き頃は町醫ながら五人扶持を上より賜はり目さましき繁昌なり是といふもしんぼうのよきゆゑなりそこたちも支格老程にこそなくともなとか身の片付出来ぬ事やあるへき必色々の所へさまよひありかすとも富山にてしんぼうし給へどくり返へし〜いふ扱もしんせつなる御人かないかにも教のとく守るべしといひもて行に程なく小杉に至りぬ水茶屋に少し休らふに彼男も同じく休居て彼道すがらいひしとを又くりかへし〜いふ其顔色言葉もおうへいなれば門人養軒初より聞ぬ顔にて居たりしがあまりに度々にこらへかねて此男は慮外者よいかなる者とも知らで様々のくりと聞たくもあらずとあらゝかにいふに予さなひそそこも我もかゝる姿にて旅行する

南多 雨國



○白龍も魚服すれ
は、東夷賦に云
且、注、吳王欲從
民飲、下、清冷之淵
化爲魚、遂、射、中
不射、白龍不化、萬乘
之位、而從于臣、恐
有、豫、且、之、患

○名立驛 越後國
頸城郡に屬す、能
生驛を距る、三
里餘

なれば、人皆乞食順禮と思ふは、尤さもあるべき事、あやしむにたらず。白龍も魚服すれば、豫且かあみにかゝり、虎豹犬羊のつくり皮誰かよく是を辨せん。彼男深切に思へばこそ、かくもいふなれ、其言葉のくどきと鄙びたるは、其人がら尤左も有りぬべし。答るに足らず、是よく人情世態を知るの學問なりといひ諫てやみぬ。かくて富山に至れば、折しも頻りに雪降て、前路もふさかりぬれば、しはしといひて逗留せしに、逢迎の人多くなり、診視を乞ふ人にいとまなく、客舎盡夜群集せしに、一夕茶話の席かの男の事語り出たるに、富山の人も手を打て笑ひぬ。

名立崩

越後國糸魚川と直江津との間に名立といふ驛あり。上名立下名立と二ツに分れ、家數も多く、家建も大にして、此邊にては繁昌の所なり。上下ともに南に山を負ひて、北海に臨たる地なり。然るに今年より三十七年以前に、上名立のうしろの山、二ツにわかれて海中に崩れ入り、一驛の人馬鶏犬とくく海底に没入す。其われたる山の跡、今にも草木無く、眞白にして壁のごとく立ち、余も此度下名

立に一宿して、所の人に其有りし事どもを尋るに、皆々舌をふるはしていへるは、名立の驛は海邊の事なれば、總じて漁獵を家業とするに、其夜は風靜にして天氣殊によろしくありしかば、一驛の者ども、夕暮より船を催して、鱈の類を釣に出たり。鱈の類は沖遠くて釣るとなれば、名立を離るゝ事、八里も十里も出て、皆々釣り居たるに、ふと地方の空を顧れば、名立の方角と見へて、一面に赤くなり、夥敷火事と見ゆ。皆々大に驚き、すはや我家の焼うせぬらん、一刻も早く歸るへしといふより、各々我一と舟を早めて家に歸りたるに、陸には何のかはりたるともなし、此近きあたりに火事ありしやと問へど、さらに其事なしといふ。みなくわやしみなながら、まづく目出たしなといひつゝ、圍爐裏の側に茶なごのみて居たりしに、時刻はやうく、夜半過る頃なりしが、いつくともなく、只一ツ大なる鐵砲を打たるごとく音聞えしに、其跡はいかなりしやしるものなし。其時うしろの山二ツにわかれて海に沈しどおもはる。上名立の家は一軒も残らず、老少男女牛馬鶏犬までも海中のみくづとなりしに、其中に只一人、ある家の女房木の枝にかゝりながら、波の上に乗みて命たすかりぬ。ありしと共皆此女の物語にて、鐵砲のごとき音せしまては覺え居しか、其跡は只夢中のごと

房の長子なり、從四位上左近衛中將兼陸奥守實曆元年十二月廿四日卒、年七十二、獅山と號す。○重村、伊達家廿三世なり、宗村の子、從四位上左近衛中將兼陸奥守、宗村の政八年四月廿一日卒、年五十五、徹山と號す。○軒冕の氣象、官位なる人なごのやなる氣象。管子に云、先王制軒冕、所以著貴賤、不美、南史宗或之傳、其人、少長、何任軒冕之容、○歐、先祖の政宗、云、至、政宗、大勝大夫、政宗、以、最、巧、和、以、伊、州、長、井、其、國、郡、於、草、斯、一、伊、達、家、於、烈、流、聞、者、尙、多、矣、○正木、氏、の、家、は、維、新、前、ま、で、大、垣、現、に、存、せ、し、ミ、大、垣、現、

仙臺侯の國許は人の言葉をかしと聞侍る、國言葉にて歌よみて見せ給へどありし時、正宗とりあへず、東から眞赤な月かすばぬけていつこの雲にのたしこひらんと詠りとぞ。又年老ける後の作に馬上青年過世平白髮多殘軀天所許不樂是如何と、さして文名もなき大將の詩には感ずべきと也。さればこそ此餘風子孫に傳へて吉村卿と聞えしは、殊に歌仙の譽れ高し、今の太守左中將重村卿も和歌の聞えあり、去年の中秋東武にての作とて、馬車途さりあへぬ世の塵に疊らて月の高き山の端と、是等も軒冕の氣象なく、其人となりおもひやられて有難くを覺ゆ。誠に御先祖正宗卿文武の大將にて其餘風今に存せりといふべし。

正木劍術

正木段之進といへるは、美濃國大垣の家中にて歴々の武士なり。此人劍術の妙を得て、此門人となる者へは鎖を授くると也。京都杯にも此鎖を傳授したる人多し。其外江戸杯には尤多く、諸國とも門葉多し。此段之進劍術の事に付ては、世間色々の奇妙のはなし多くして信じがたきともあるに、旅中にて彼門人に親



○大垣は戸田氏の城地なり

敷交りて其修行のあらましを聞しに誠に感すべくたふとむへき事也此段之進の父祖にや有けん幼年より劍術に心を寄せ日夜寢食をわすれて修行せし頃一夜寢間の襖を鼠の咬音に目覺て疊をたふきて追たりしに鼠逃去れり暫して少し寢入らんとする頃また鼠來りて襖を咬む又目覺て追へば鼠逃去る心ゆるみて寢入らんとすれば鼠襖を咬むかくのごとくする事三四度に及びて段之進思ふやう我氣みたすして彼鼠に徹せざればころ眠るに從ふて鼠襖を咬なりとて起直り座を正して一心に氣をわつめ鼠の方を守りつめて居たりしに鼠つひに來らず其後は鼠の音する度にかくの如くするに鼠咬とわたりはす後にはけたを走る鼠をも氣を集てにらみぬれば落る程に成れり今に至り其門人氣を煉る事を稽古するに鼠の物を咬にてためす事ありといふ門人の中にも二三人はよく鼠を退る程に至れる人ありと也いかなる猛獸といへども先此方の氣を以て制す敵人といへども立向ふより先ッ氣を以て勝事也と云此事は奇妙のやうに聞ゆれどもさるともあるべしとおもふ我學ぶ所の醫術にも壓勝の法といふ事ありて氣を以て禁するに積氣を開かしめ或は腫物を押散らし又は狐狸に魅せらるる者を治し其外奇効目を驚す程のと出來

○熊澤先生 熊澤菴山のこゝなり

○法華經の水火も云々法華經王品に云法華經成道品に云法華經普門品に云法華經譬喻品に云法華經方便品に云法華經持驗論思惟是經爲化人說所得福不能燒水不能滅火

るもの也其法皆正木の修行のとし又熊澤先生の書集られし書にも敵をうたんとする人の其家に忍ひ入らんとすれば内に寢入りたる當歳の小兒啼出し其父目を覺す折悪しと暫しひかへぬれば小兒もよく寢入て家内静也又討入らんとすれば小兒啼出す再三かくのつくしてついに討事を得ざりし是其殺氣の無心の小兒に徹せし也と云其理の論は格別先正木の修行に心を用ゐられし事を感すべし又彼鎖所持の者はいかなる強敵に逢時にもおくれを取事なく又いかなる猛獸盜賊といへども此鎖を所持する人には近付とあたはずと云へり是はいかなる事にてかくはいふ事なるやと尋しに何人にもせよ正木の門人と成り鎖を受んと願ふ時先誓約をすることゝそ其誓約の辭君に不忠なるまし親に不孝なるまし朋友に信を失ふべからず虚言いふへからず高慢の心を起すべからず大酒すべからず禮義を失ふべからず公事にあらずしてみだりに血氣にはやり夜行すべからず猶此外數々の條目ありて長し是に一ツもそむくことあらば摩利支尊天の御罰を蒙りて武運に盡べしと也初めにかくのごとく誓ふことゆゑにもし此辭にそむく者はたとへ鎖幾條所持するといへども其しるしなく鎖の奇特を失ふと定めたり誠にかくのごと

神の事なれば中々危畧にはせずたとひ御巡見使又は御目附等の御通行の節も此まゝにて若きもの、戯れなごにあらすと云。また其しめ繩に紙を結びて多く付たり。是はいかなる故と問へば、これは此わたりの女よき男を祈りてひそかに紙を結ふ事也と云。誠に邊國古風の事なり。京都の今出川の上にある所の幸の神といふは、いかなる神にてましますや。すべて田舎には色々の名は替われども○○○○○○○○○○石を神體として所の氏神杯にいはい祭りてたふとひかしつく所多し。日本の古風にや、神代の巻にいふ所、或は春令の古事杯ふるくいひ傳ふる事多ければ、神道の秘事にはかゝる事も有べしとぞおもふ。

蜃氣樓

唐土の詩文にも多く作りて、もてはやせる蜃樓といふとあり。又海市ともいふ。海上に雲のごとくに氣立のぼりて、樓臺城廓の形をあらはし、其中に人馬往來せるまでも、空のあたり見ゆる也。唐土の書物にいへるは、是大海の底にある大なる蛤の氣を吐て空中に樓閣のかたちをあらはす也と云。又蜃といふは其形龍

○生二紀○三前○の○に○鳴丹て安は山りはに○是もての
殖のの尊に里國のこ握あり動此の登り西津に本非大そ
のののの令甘湖田こ美く動の地八里輕云朝勢わ
見えの二町川なら驛しての山の月弘俗俗のれ
をな古里、距ら温所庄あ登の神、物四に前陸陸の事
知る事甘鼠るに海ななれに、此の雪下木岩志卷事
り見諸二關に羽羽なならな丸ののあ高よ山二也
して再記町をし羽羽なならな丸ののあ高よ山二也



蜃海画成

國にてもたま〜は有り云是も向ふに山あり其外の國にては屋氣樓をむすふ事いまださかず奇を好む人は三四月の頃越中に遊びて此樓臺を見るべき事也

佐渡わたり

我が旅行の時はいつにても五戒を立て道中記の初に大に書付て毎日是を見て堅く慎むとなり其五戒と云は渡海馮河夜行異食賤妓也是皆旅行の人の最身をあやまち病を得るのも也志ある人は懼るへき事は深くおそれ身を全くして長生を得てこそ藝術をも成就して人を救ひ後世を恵むとも有べし此五戒の事も常々よく心得て侵すましと思へども其時に臨み足つかれ天氣静なれば船に乗るべき心も起り川越しに無理の賃錢をむさばらるゝ時は是斗の川何程の事かあらんとも思ひ途の縁合せによりては日暮ても宿をとりかね人の馳走の志を無下にせん事を氣の毒におもひては喰なれぬ異物をも箸を下し旅路深きつれ〜には瘡病の浮れ女にも一夜を契るなどは皆其時に當りては兼ての心の外になりて跡にては大なる災を得る事也此故に毎日

○屋氣樓は空気の屈折及び全反射の作用によりて現はるなり

○馮河無理して河を徒歩渡りする事不致馮河不致雅に云馮河徒涉河也

目にふるゝ道中記に書付てかりそめにも侵さしと慎事也然るに越後國直江津に到りけるは三月八日の事なりしが今町の旅館松屋といへるに入りぬれば越中にて親敷交りし松軒といふ人此間より此松屋に逗留して居られつれば旅中の邂逅心なぐさみて打語らふに松軒いふは今宵此町より佐渡に渡る船ありよき便船なればみづからは渡る也そこにも佐渡か島一見し給ひんやよき道連れなればとも〜に彼島の名所探らんとすゝむるにや天氣は晴たり風は静也又かくよき便船も有ましければ今宵出る事ならばいさや彼地に三五日逗留して風土をも見んものをも例の不了簡出て何心なく暮過る頃より船に乗りぬ纒に水手四人乗れり客といふは松軒主従余師弟のみなりるの外に荷物少々積入ていと小さき船なり殊に北海は冬より春に至り浪風荒て海上に船の往來なくやう〜四月初比に至り船を出す事也此比は天氣打續き長閑なればとていまだ三月の上旬なるに初て佐渡に渡らんとする船也是は諸方ともいまだ佐渡に渡りし船なき折なれば其内に荷物を積渡れば格別の利をも得る故に危きを侵して渡れる船也扱初更過る頃湊を出しに年老し船頭一人送り來て船中の水子共に云様は北の空に雲少し見ゆ又月の色も勝れ

○北漢 本書卷二、
廿一頁に註せり

○上絃の月、新月
より満月までを上
絃といひ、其後の
月を下絃といふ、
絃は弦の誤

○出雲崎は越後
寺泊崎より三里十
七町餘は同郡に
○里三十三町餘
○廿八日、木書卷二
○初八日、石見
○後野志の二に
○文、形也、百年之
○資、其所遺名與
○而、其有故、佐
○掛、舟子、浦、女
○初、情、和、狀、之
○其、情、逆、祝、師、期
○也、則、哀、而、不、傷、者
○奉、勅、而、撰、集、而、後
○樂、詠、而、入、集、而、後
○夫、越、州、者、也、不、可
○無、之、然、未、開、入、撰
○集、者、況、於、後、之、仙
○遊、女、初、者、逸、如、之
○奇、也、初、者、逸、如、之
○聲、於、今日、我、其、名
○不、衰、其、聲、在、予、里
○記、其、事、垂、不朽、云
○用、其、事、垂、不朽、云
○三月十八日、久賀
○船、山、桑、門、元、元、誌、

ねば、いかに此程天氣よければとて、油断はならず、佐渡に渡るは大事の海也、北に見ゆる雲動きなは中途より急に何方へも船を着へし、佐渡山近くなりても風起れば、佐渡に取付事難ふして、北漢に吹放たるゝ也、若き者元氣にはやりて、わやまちすなど、繰返へし、いまして、歸りぬ、氣味わるき事をもいふものかなと思ひながら、帆に任せて、北海四五里か程出る所に、北の方の雲と天と接せし所いと黒く成り、上絃の月入る程に、其色ますく、わやしくて、風や、替れば船主ども、氣遣ひて、夜明る頃には、西風や落ん、東風にや替らんと、口々に評議す、是を聞くに、彌おそろしく、又晝の程北海を見しに、海中より水氣の揚りし事、杯思ひ合せて、是は必明日は雨風や起らんと思ひめぐらすに、安き心もなし、其内に風や、起り来て、波逆立船のゆる事、篋をひるかごとし、岸遠くは離れたり、殊に夜更ぬる事なれば、四方皆渺茫として、たよるべき所見えす、船頭は何方にもせよ、船を陸に着よといふに、此あたりには着へき所なしといひて、船頭さへ船をわやとりかねて見ゆれば、今にもわれ、雨降きたり、風いよく、われ來らば、此船忽ちに覆らんものをおもへば、心のうちやるかたなく、立ても安からず、居りても安からず、此時に日頃の五戒思ひ出て、けふはいかなれば、此船に乗りて

かゝる難海に浮み出し事や、日頃書付五戒はいかにして忘れぬるとぞやと我ながら悔ひ怪みて、何卒して一刻も早く恙なくともとの湊へ戻れかしと心中に祈念し、是より以後は此事心肝に刻みぬれば、いかなる事ありとも海の船には乗るまじと、獨り心に誓ひ居たり、されども波静まらず、西にゆられ、東に漂ひする程に、心神惱亂して、誠に諺にいふ三年の壽命も促りし事を覺へたり、然るに天の冥助ありて、風又東北より吹出て、五更の比不思議にも、どの直江津の湊に入りぬ、其時の嬉しさ、誠に蘇生の心地ぞせり、いそぎ松屋にわがり、よもすがらの心勞に身もいたくつかれぬれば、其翌日は終日寝て休息す、誠に此直江津よりは佐渡國まで三十五里の海上なるに、かゝる小船に乗り、また春淺きに限りしられぬ、北海に浮み、此天氣に逢ひしに、恙なくともとの湊に歸り着ぬるは、不思議の事ともいふべし、すべての常なみの佐渡わたりの湊口は、出雲崎といふ所を第一とす、出雲崎は佐渡の渡り口の町なれば、繁華の地なり、海上も程近く、纔に十八里を隔てたり、又出雲崎より四里東北に寺泊りと云所あり、此所も頗る繁華の地なり、此寺泊りは佐渡へ第一に近き地にて、十六里の海上也、此どころ、むかしは佐渡の渡り口の湊、此寺泊り也、むかし爲兼大納言、佐渡國へ

○村井氏 村井椿
は熊本の儒醫なり

ば必らずおろそかに思ふべからずと我父母も常々をしへ候ひぬと語る士人も初は只なほざりに一見の心にて來りしが此農夫がやうすを見聞するに今更に心もあらたまりねんごろに拜して歸りぬとなり其後余肥後にて村井氏に親しく交りしに、ある日村井外より歸り語りしは、扱も今日は珍敷墨跡を見たり、此國の家老何某の方へ近き頃江州より賀養子に見えし有り、其方へ用事ありて行て物語の序にふと思ひ出て、その御里方の御領分に、中江藤樹といひし人ありしよし、御存知にもや、其手跡なくば所持し玉はずやと語り出しに、彼人座を改め、藤樹先生の御事は、我父祖以來尊敬いたし候ひて、老父我を愛するのあまり、遠方へかく參るに付て、兼て秘藏の一軸を出して得させぬ、御所望ならば見せ申べしとて、奥に入り禮服に改め、一軸を携へ出て床にかけ遙に引さがりて拜せられぬ、其尊敬かくばかりなれば、我も手あらひ口そゝぎなせしめて拜してやみぬ、分部侯にありては畢竟領地の一農夫なるを、かくまで敬せらるゝ事代々賢を愛し徳を尊ひ給ふことも有り難く、又藤樹先生も眞の大儒なるともはじめて知りぬと申されし、此二事耳に残りあれば、此度よき序なれば、墓にも調し講堂をも一見せばやとおもひて、大溝の東の加茂といふ所より南

○分部昌命 大溝
侯分部昌命の子に
して、立藩と稱す
○さばり相違の
學風なるに、藤樹
は王陽明の學を奉
ぜしに、其子の白
鹿洞規を掲げたり
しを訝みたるなり

へ入る事八丁にして、小川村に至る農夫老婆までもくはしく道を教へ迷ふ事もなく、講堂の前に出たり、雨戸とさしあれば、其となり志村周助といふ醫者の許へ案内して、講堂を拜し、度由いひ入るゝに、まづ玄關へ上り給へといふ、草鞋がけなれば、只かりそめに講堂の案内をといへど、強て足を、ぎの水など持來るまゝ、やむ事を得ず、草鞋脚絆など解て玄關へ上るに、周助出迎ふ、四十ばかりの惣髪なり、茶煙草の世話も行届きたり、余講堂を拜見し、神主をも拜し、度由乞へば、周助奥に入り禮服を着て、講堂の鎧を手に持、いざ來り給へと引連て行く、扱講堂を開きたるに、堂はかやぶきにて、間敷四間あり、書院南面にて、十五疊椽がは有り、向ふと西脇に押入あり、此書院講場なり、其次對客の間八疊に床あり、其次拾疊、其次壘所なり、正面椽側の上に藤樹書院といふ四字の額あり、分部昌命拜書とあり、十疊敷の間に朱子の白鹿洞の規則を板に書てかけたり、さばり相違の學風なるに、此文をかけられたるも、殊勝に覺ゆ、押入の内に深衣を着せる繪像あり、釋菜の時の圖と云、其前に厨子あり、其内に神主あり、上箱に先生姓中江諱原字惟命、號願軒、稱藤樹先生、慶安元年戊子八月廿五日卒、葬邑東北玉林寺の三十八字あり、箱の内の神主常法のごとし、扱悉く見終り、周助宅へ戻

のあまり、行李より別の金子拾五兩を取出し、馬かたにあたへ、もし此貳百兩な
くば我一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に至らん、されどこの高
恩中々言葉のいひ盡すべきにあらねども、先當座の御禮までにおくり奉ると、
涙を流し悦ぶに馬方大に驚きし顔色にて、そなたの金をそなたに取納給ふに、
何の禮といふとあるべきとて、手にだに取らず、色々にこしらへいへども、さら
に受ずして歸らんとする故、やむことを得ず、拾兩とへらし、五兩となし、三兩と
なし、段々へらして、つひには金貳歩となし、せめて是斗は我心の悦びなれば、受
給ふべし、左無くては我心もすみ申さず、今宵もいねがたしと理を盡し、詞を盡
しいふに、此金を受申程ならば貳百兩をも留め置申べし、かくかへし申から
には、聊にても謝禮を受るは我心にあらさず、さりとて餘儀なくのたまへば、さら
ば鳥目貳百文を玉はるべし、是は今夜やすむべき所を是迄追かけ來れる貨錢
なり、是は我とるべき錢なれば、申請べしといひて、貳百文にて酒をかひ、其家の
人にふるまい、我も酔程のみて歸らんとす、飛脚も感に堪かね、さるにてもそこ
はいかなる人にておはすと問ふに、名ある者にあらさず、又何一ツ知れる者にあ
らず、只我在所の近所に小川村といふ所あり、此村に與右衛門といふ人おはし

○此講堂明治十三
年九月火災のにめ
に、有志者一宇を再
築す、今の藤樹書院
是れなり

て、夜ごとに講尺といふことあり、某も折ふし行て聞侍りしに、親には孝をつく
すべし、主人は大切にするものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふ
べからずなどいふ事、常々語り給ふにより、今日の金子も我物にあらざれば、取
べき理無しと心得し迄のとなりといひすて、歸りぬ、飛脚はそれより京への
ぼり、いつもの宿に至り、扱も此度は辛き命いさのひて、各方にも對面するとな
りぬとて、有し次第をくはしく語るに、折ふし其家の裏に熊澤治郎八、田舎より
のぼり居て、學文修行最中の事なりしが、此物語を聞て其人こそ誠の儒といふ
もの也とて、其翌日すぐに江州に到り、小川村を尋て隨從を願はれしに、人に教
申べき程の學徳なしとて、さらに隨從をゆるし玉はず、熊澤ひたすらに願ひて、
二日が間、藤樹の門にたゝすみて歸らず、藤樹の老母是を氣毒がり、よしや先内
へ入れ申せよとありし故、いなみかたくて内へ入れ、つひに師弟の契約をせら
れしよし、其後、藤樹を備前より招き給ひしに、其身は病身なりと堅く辭し、門人
熊澤といふもの有り、御役にも立べき者なりとて、熊澤を出されけり、いづれも
格別の事ども也、長物語なれど、藤樹先生の事跡くはしくしらぬ人も多ければ、
見聞及所を書付ぬ、江州に遊ぶ人は必彼講堂見るべき事也。

「わらし」奥羽にて
又「ほし」さいふふ
わらしは童男なり

るは都遠き片田舎にありとらんべし。

東遊記卷之四終

東遊記卷之五

秋田路

○秋田杉世に秋
田杉物語さいふ
のあり佐竹義親家
の騷動のこゝな記
はしりこれにや疑

世に秋田杉と云寫本ありて、秋田の路の事によりて書けるものも有り。我秋田を過しは三月の末にて、其路いまだ不出といふ。只大指のふとさ程なるは諸方にて食せり。それすら上方にてはいまだ見及ざる路なり。但其性甚薄く、たとへば竹に似たり、上方の路のごとく、中まで實したるものにあらず。それゆゑ鹽漬又は糟漬杯にしては、薄く平たくなりて、見たる所にも賞翫なし。故に京都大坂杯へは送り登す事稀なり。彼地にて聞に、六七月の比盛に出るとなり。尤大なるは秋田城下より十里斗隔りて長木が澤といふ所ありて、其澤に生ずる路長六七尺に及び、ふとさ平皿に滿る程なり。かの秋田杉にいふ所のものは此所の物なりと云實に寒國なれば三月頃は一切の青葉はまだ不出、路のふとさを見ざりし事残念なり。總じて秋田に限らず、仙臺南部、津輕、松前の路皆大なり。就中蝦夷地に入りては馬上にて往來するに、路の葉傘のごとく頭上に覆ひかゝるとなり、ふとさも壹尺、貳尺廻りのもの多しとぞ。秋田、津輕邊極て北地ゆゑ、松なく、

○虎杖「いたぎ」
○鳥頭「いふさり」
○車前草「いふ草」
○活草「いふ草」
○活草「いふ草」
○活草「いふ草」

竹なく、其外の草木にも無きもの多し。鳥類も中國のごとく多からず、只虎杖、鳥頭、車前草、獨活、仙臺、萩等甚多く、且肥大にして、上方にては見ざるものにて目を驚せり。又熊笹甚多し。深山は皆是也。彼地にては根曲り竹と云、蝦夷地にてはシヤコタンと云、蝦夷にあるは尤大にして、ふとし、長八九尺ふとさも、杖程なるもの多し。奥州の内にて黒き狐を見たり、上方には無きものなり。蝦夷地には有るよし兼て聞けり。純黒なる狐の皮は尤珍重する事なり。我見たりしはあまり見事なる黒色にてはなかりし。

朱谷

奥州津輕の外が濱に平館といふ所あり。此所の北にあたり、巖石海に突出たる所あり。是を石崎の鼻といふ。其所を越えて暫し行けば朱谷あり。山々高く聳たる間より細き谷川流れ出て、海に落る。此谷の土石皆朱色なり。水の色までいと赤くぬれたる石の朝日に映するいろ、誠に花やかにて目さむる心地す。其落る所の海の小石までも多く朱色なり。此邊の海中の魚皆赤しと云。谷にある所の朱の氣によりて海中の魚或は石までも朱色なること無情有情とも是に感

○卯の年 天明三年なり

する事ふしぎなり。余もあまり珍らしさに谷川を傳ひ、奥深く入りて見るに、朱彌多し。土を掘りて見るに、其色益あざやかなり。大なる朱石を打碎き、少々袖にし歸る。其石乾く時は朱色少し黒みありて、辨柄の色のごとし。此谷の入口には柵ありて、人の入る事を禁じ守る人ありて、領主の益とせられし事なりしが、卯の年の饑饉に外が濱わけて甚しく、此あたりは人種の盡たりともいふ程の事にて、守るべき人もなければ、又盜取る人も無し。余が遊びしは僅に三年の後なりしが、柵も破れて守る人無く、通路自由なり。よき時節に來りしともいふべし。極上品の朱砂、辰砂には及ばずとも、人近き國にあらば、いかばかりの益ならんかし。

化石溪

○化石溪 越前地
○大野郡 越前地
○中打波村 越前地
○里山 越前地
○有、此流に河に
○上時、一日程も入置
○上り、皆石の如き物

越前國大野領分の山中打波村といふ所に、何にても石に化する谷あり。余も彼地に遊ばんとせしかども、折節極月なりしかば、通路雪に閉られて至る事あたはざりき。其邊の人にくはしく尋問に、大野の城下より山道九里にして、細き谷川あり、其水の流に諸器物何にても半月或は一月程入置時は皆石と成る筆

流れ出て粘着して
石も成り流れて玉
付りて成る物に
るへし、奇に云へ
えたり、雲根にも見
○越前志卷二大
野郡の打波村
水川に流す所、此
水底に積る物、一
物寒暑を論ずる
月を過す、石に
化す、其品物の形
化石と稱す、依て

○大沼山は羽前
大沼村にあり、一
に浮島と云ふ、
湖は東西二百間、
南北三百五十間、
湖中大小數十島の
浮島あり、成れるも
の集りて、水中に

紙下駄草履膳枕の類にても皆石となるぞ、余京都にて先年木の枝に雪の積れるが、其雪ともに石となりたるを見たり。又半紙書束をわらにてつかねたるが、其わらともに化して石と成りたるをも見たり。是皆此谷にて作りたるものとぞ、其頃思ひしは極陰の地ゆゑ水中に寒氣の時久敷漬置て石と化するにやと考へしが、左にはあらず、夏日にても同敷石となるぞ、それはいかにして化するるとぞと委敷尋窮るに、谷川の水より沫のことき物流れ來りて、漸々に其物に粘着して石と成るとなり。然れば其谷の奥に玉液有りて流れ出物に付て石となるにやと思はる。蠻夷諸國の事を書し書を見し事の有りしが、其中にも蠻國の内に諸物の石に化する地あることを載たり。此谷も其類にや。

浮島

出羽國山形より奥に大沼山といふ所あり、其山主を大行院といふ、修験道にて、併諾の數寄人併名を鷹窓といふ。此山の縁記を聞けば、人皇四十代のみかど天武天皇の朝、白鳳年間、役行者の開基にて、蒼稻魂神勸請の地なり。此山のみたらしの大池あり、大沼と名付く。是は池の形大の字に略似たるをもて名付しとか



孝敬画
[Red seal]
[Red seal]

臨みて、せひ其不思議をも見届けんと、例の二木の松の本に箕居して、池の面を見渡したるに、きのふ見たりし二ツの小島見えず、こは怪し、さるにても動けはこそと空頼母しく、出るまゝの發句なご口ずさみ居ける程に、こなたの岸根少し動くやうに見ゆるにぞ、さればこそと目もはなたす詠居るに、一ツの島とわかれて浮み出つゝ、静に池の中にはなれ行くさまいと目さまし、又まばし有りて向ふの岸根はなれ出て、こなたに浮み来る、かくてそこより浮み出る程に池の中に數々の島出来て遊行往來す、其さま物有りて島を負ひ廻るがごとし、目さめ心動きて悦しさいはんかたなし、中にも彼奥州島にてもや有らん、二三丈餘にも及びていと大きく、其島の上には小松生ひ茂り、藤の花咲かゝりて、つゝとに色を争ひながら浮み出て、遊行するさま不思議といふもあまりあり、面白さ限りなくて守り居るに、其島直に岸に付にもあらず、右に寄り左に趣き、心のまゝに遊ぶ、又後より出来る時、先きの島に行わたるに、よの常ならば俱に押行べきに、左はなく先きの島おのつから傍によけて、行べき島を通すなど、誠に心あるさまなり、終日見居たるにも、いかなるゆゑといふことをえらす、さて有べきにあらねば、大行院に歸るに、主僧も浮島を見たることを賀して、浮島の

○この浮島を實見せし人の話に云、こゝれは根を結して、洲をなせしが、たゞ水面に浮き居るに、風散れり、合するなり、さう離る

○宮古は陸中國、伊都にあり、羽後一里十五町餘、さ

の發句などを乞へり、其翌日はいとまして立出るに、江戸の旅人四五人湯殿山登山して歸る、此浮島を見物せんとて來れるに、逢きのこと、語れば、是非今一度伴ひ申べしといふに、ぞ、いまだ餘興も盡ざれば、又同道して再び彼池邊に到り見るに、きのふ見し數々の島もなくなり、纔に二ツばかりぞ浮み居て、少しも動く氣色みえず、塘雨は益信じて、やがてぞ遊行すべし、見給へといひて待居けれど、さらに動くべき色もなければ、旅人大きに退屈し、いたづらなる所にひま入りては、明日の道のつもり悪し、ばや行べしとて、むなしく去れり、いと残り多きことなりき。

大骨

余が奥州に遊びし頃、南部の内宮古近邊の海濱に、ある大風雨の翌日、人の足ばかり、長さ五六尺ばかりなるが、肉はたゞれながら、指もいまだ全ふしたるか、流れ上り居たり、魚類かど見るに、人の足に相違なし、いかなれば、かく大なるものぞと、其あたりの人驚き怪しみ、其頃其邊専らの取沙汰なりき、余是を聞て考ふるに、南半田村の大骨といひ、其外にも村里の氏神などに祭れりといふ神體、格



東洋園

く石巻はなまき陸前國
 牡鹿郡に屬し北
 上川の河口にある
 要港なり
 ○山島山維さか
 く、駒形山の東麓
 にある海峽にして
 金華山に至る要津
 なり
 ○権現の社、龍藏
 権現の社なり、今
 縣社に列せらる

き大浪來る晴天無風の時といへども必此大浪は寄ると也此波を彼地の方言
 に御殿隠しといふ天氣靜なる日は此の大浪を一ツ越えてすむとあり又少し
 風波ある日は大浪を四ツも五ツも越ゆることなり此所の船は常々此浪をこ
 ゆることを覚え居るゆゑ浪來れば其浪に上り浪引時は其浪に連れて自由に
 船を操る然れども他邦の人はいかなる丈夫なる心の者にてても此危さに堪か
 ぬるなり島には寺院一字ありて辨才天鎮座の山なり絶頂まで四十八丁とい
 ふ島めぐり六丁壹里の詞にて三十四里といふ峯上に權現の社あり箱崎とて
 天女出現の靈窟もあり峯を向ふへ越ゆる所に水晶石といふあり高さ數十丈
 廻りも數十丈にして全體六角の白石なり明徹にすぎとほるといふにてもな
 し然れども奇品なり其石上に一本の松自然に生じて海風に多年もまられたれ
 は木立枝ぶり人作にて造りなせるが如く景色たぐひなし此金花山は山中皆
 黄金なりといひ傳ふ實に今にても海砂皆金色に光り波に映していと見事な
 り山中も岩石に金沙吹出て道路の間も皆金色に見ゆ權現の黄金を深くをし
 ませ給ふといひて旅人取去る事を堅く禁す又歸路に船に乗らんとする時は
 其山中にてはきたりし草鞋を脱捨て船に乗る事なり是も草鞋に付たる砂金

浦三條は越後國
浦三條に屬す、今
浦三條に屬す、今
浦三條に屬す、今
浦三條に屬す、今
浦三條に屬す、今
浦三條に屬す、今
浦三條に屬す、今
浦三條に屬す、今
浦三條に屬す、今
浦三條に屬す、今

に熱氣なし、此の火
に熱氣なし、此の火
に熱氣なし、此の火
に熱氣なし、此の火
に熱氣なし、此の火
に熱氣なし、此の火
に熱氣なし、此の火
に熱氣なし、此の火
に熱氣なし、此の火
に熱氣なし、此の火

を陸地へ渡すまじき權現の思召ゆゑとぞ、此邊の海にては海苔、和布、鹿角菜の類を多く生し、海邊の民是を取て産業とす。又海鼠を生ず。此海に生する海鼠は金砂を服したりとて、金海鼠と稱して、乾し堅めたるを萬邦に傳へて、人皆珍重す。京などにては、眞の金海鼠は甚得がたく、得れば甚珍重す。誠に其形他邦の産より、は小く、味格別なり。此島は、誠に日本の正東に當りて、海中に突出たる所なれば、日本の東の極といふべし。南部、津輕の地方は、奥州の奥なれども、仙臺より眞北に向ふて、入るゆゑに、數百里入れども、東には出でず、北に入るなり。此邊は仙臺より程近けれども、海を離れて東に出たる地にして、誠に是より東は限り無き大海にて、三千里、五千里には國ある事なき所なり。波の大なるも、尤の事なり。すべて海中の難所といふは、打開きたる大海には、あらず。唯山と山との幅狭くなりたる所を、追門といひて、潮勢も急に成り、波浪も逆立て、渡りがたきなり。幅狭き所、底淺き所のみ、恐ろしく、余なども、初は海を渡らば、隨分里數短かく、幅狭き所のしかも、底淺き所をこそ、撰むべしと思ひしが、赤間關の渡りを越えて、其潮勢の猛なるをおそれしより、松前の渡り場の急潮を考へ、合せ、諸國の追門を乗りて、底淺ければ、浪逆立、幅狭ければ、潮急なるを知りて、唯海は廣く、深き所

を撰りて、乗るやうになりたり。理はよくしれたることなれども、實境に逢ざれば、心得違ふ事も多きものなり。

七不思議

越後國彌彦の驛より南に入る事五里にて、三條といふ所あり、甚繁華の地なり。此三條の南壹里に、如法寺村といふ所あり。此村に自然と地中より火もえ出る家、二軒あり、百姓、庄右衛門といふ者の家に出る火もつとも大なり。三尺四方程の圓爐裏の西の角に、ふるき挽臼を居ゑたり。其挽臼の穴に、箒の柄程の竹を、壹尺餘に切りて、さし込有り、其竹の口へ常の火をともして、觸るれば、忽ち竹の中より火出て、右の竹の先に、ともる。又強く吹消せば、即きゆるなり。其火常の燈火のごとし、長さ壹尺ばかり、ふとさは、竹の筒程にて、たとへば、二三百目の蠟燭をともせるごとく、光明甚だ強し。此火有るゆゑに、庄右衛門家には、むかしより、油火は、不用家内、隈々までも、晝のごとし、挽臼に、差込置たる竹を、續げば、其火何方迄も、行きて、ともるなり。されど、水のごとし、前後左右へ、わかれては、不出、只一方のみなり。外へ、氣の洩れざるやうに、竹を、續ぎて、導けば、遠くまでも、及ぶなり。陰

曆二年三月七日
 寺修造事殊可
 二并誠一之山
 佛被三進三御
 於南都奉徒中一
 被送三奉加物於
 大動運重源聖人
 訖米一萬石沙金
 正云云あり一重
 源は俊樂坊のこ
 にて武衛は頼朝
 五十兩さあるは
 なるへし
 〇奇異の巖窟五
 訂豆州志稿卷五
 村(南)院(山)石
 海岸ニ在リ、卯辰
 ニ向フ、小舟ニ棹
 シテ宿ニ入ル、左
 三四歩ニ少ク、舟
 折シ、漸ク低ク、舟
 前ムテ得ス、此間
 激浪進退シテ、暗
 乍明、其光燭ニ衆
 如シ、見レハ、金八
 九歩ニ列立ス、右
 網七像三、立ス、右
 方ニ在ルハ、最大ニ
 シテ高尺餘、中者
 折シテ物ヲ授ル
 狀折シテ物ヲ授ル
 在ルハ、左方ニ

なり、それゆゑ三月節頃大潮干の頃は、佛を高く拜み、岩根高くあらはれ、佛体
 に浪打かゝり覆事なれば、佛体常にあらはれて、穴の内明らかなりと云、其頃
 に入る者佛のいさす岩根に舟より上りて、巖壁を探り見れども手にさはる佛
 体もなく、又それと見るべき形もなし、其岩根を少し退けば、佛体明らかに拜ま
 れさせたまふと云、一つの頃よりかゝる奇異の靈跡ありと問ふに、昔は此穴の
 中恐ろしとて入る者なかりしか、七八十年前、蟹なる者ふと咆さいひなを
 探りて入りしに、人探らぬ穴の事なれば、夥敷得物ありしより、段々奥深く入り
 て、つひに此佛体を見出せしなり、此邊昔は甚の惡風俗にて、人の心おそろしか
 りしが、此靈異を拜みしより佛法を有りがたき事と知り、自然に人の心柔和に
 なり、今にては温淳の風俗となれりと云、昔の物語を聞くに、正月年禮に来る者
 先づ唱へて、イナサ參らふと云、あると答へて、寄せて御座れ、古針で祝ひませふ
 と、是を年始の祝言とす、是をいかなるわけと問ふに、イナサとは此海上の惡風
 なり、此風吹時は此邊の者ども手ん手に松明を持ち、或は脊に戸を負ひ、火を燃
 して濱邊を往來す、沖に行かふ船難風に苦みて入るべき濱やあると云、ろろへ
 居る時、此火の光りを見て、人家やある船やあると馳來れば、海底の岩に船碎け



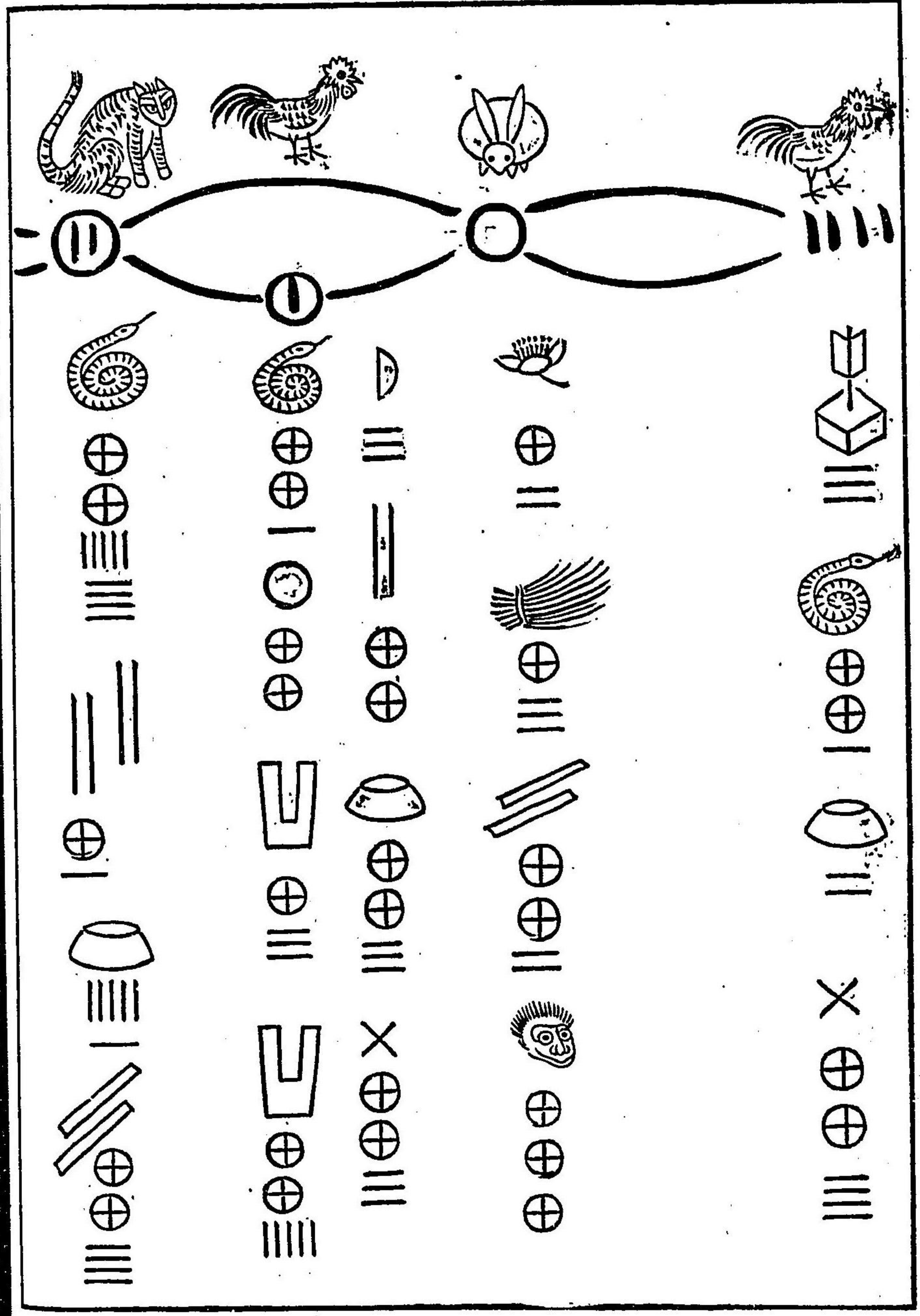
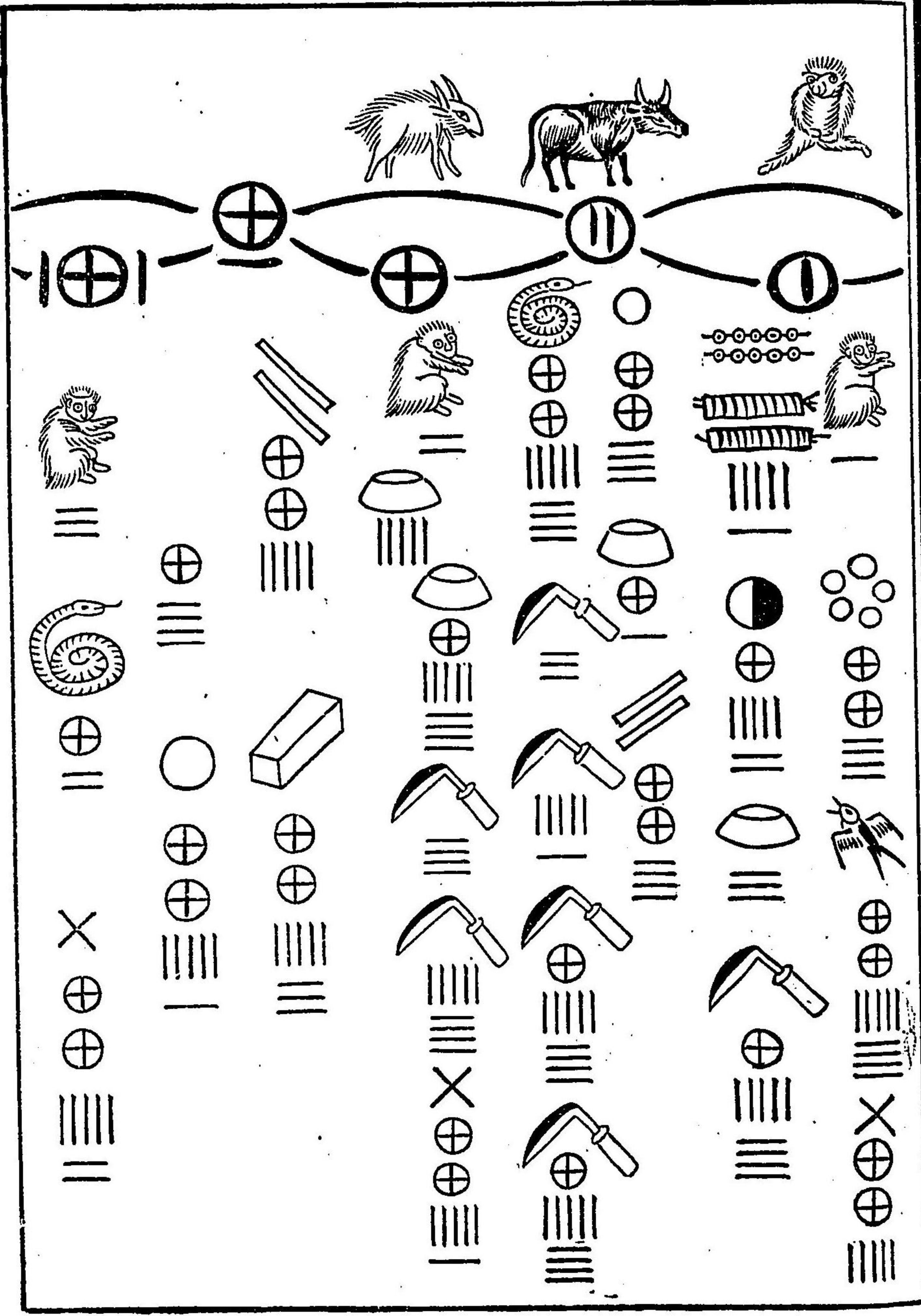
法橋東山

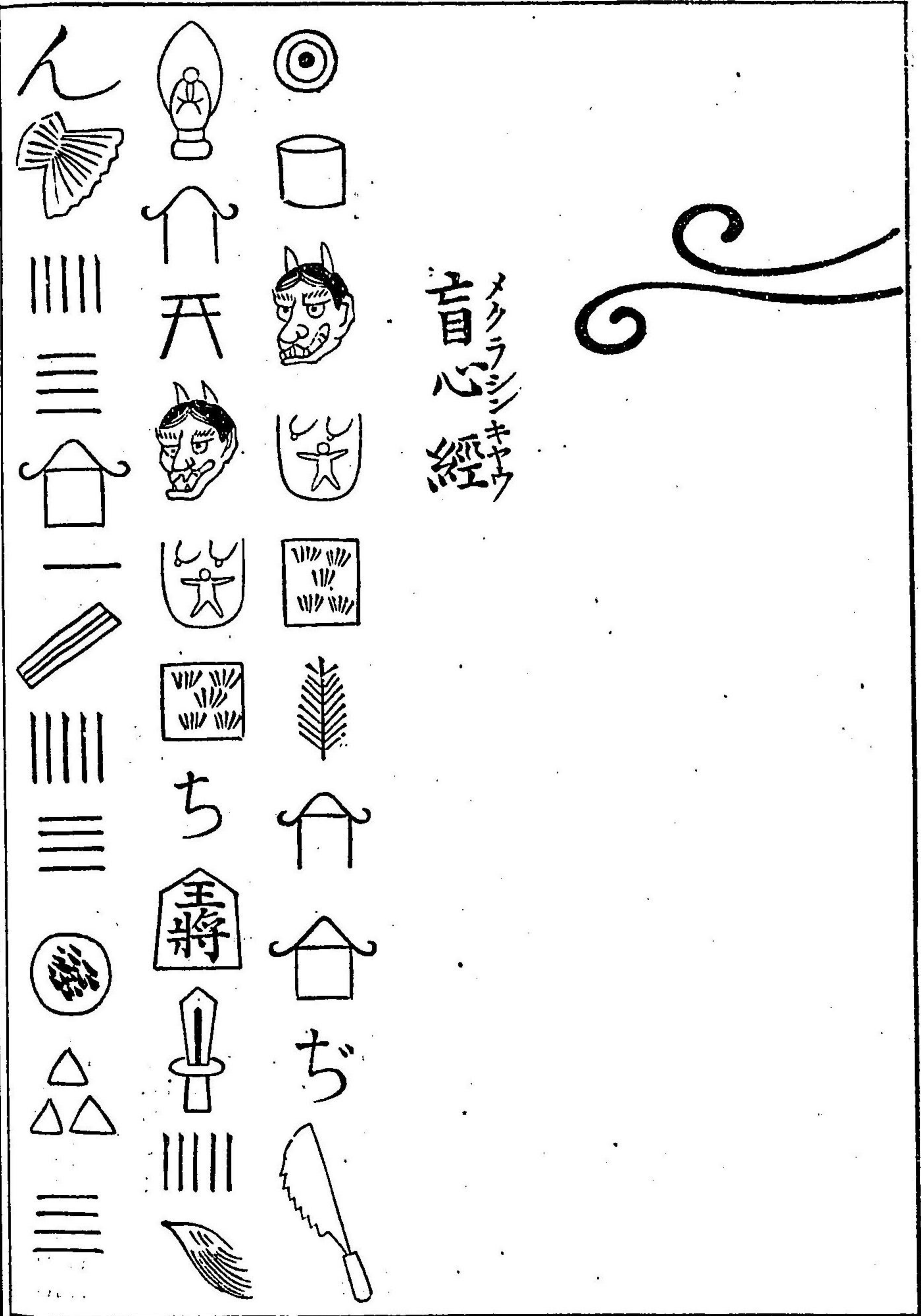
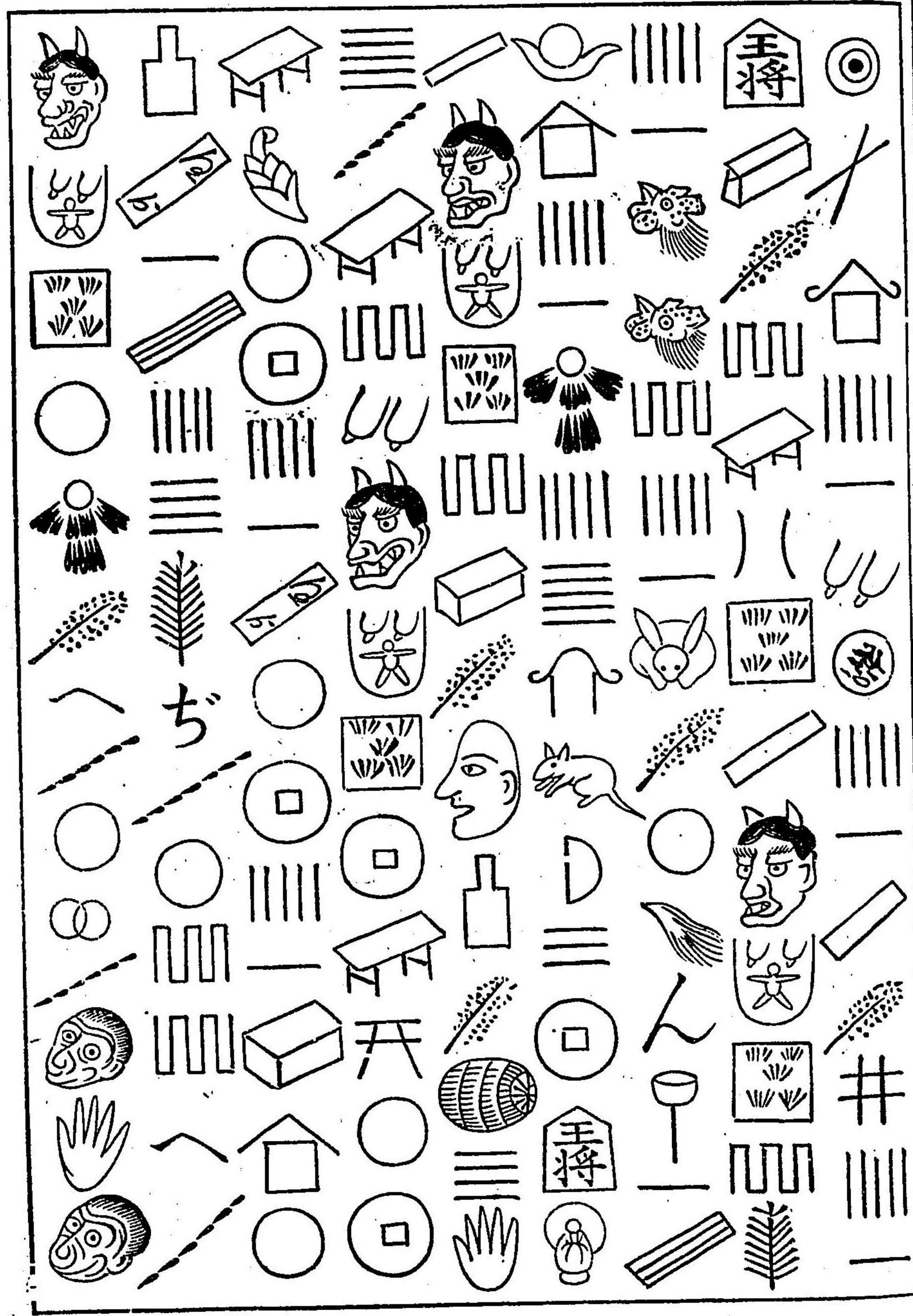


○香川子 香川太
沖なり、名は修徳、
字は太沖、秀麻呂
あり、一州の人な
り、醫を後藤長山
に學び、大に行は
る、寶曆五年二月
十三日歿す、年七
十三、著述行餘醫
言、藥選等あり

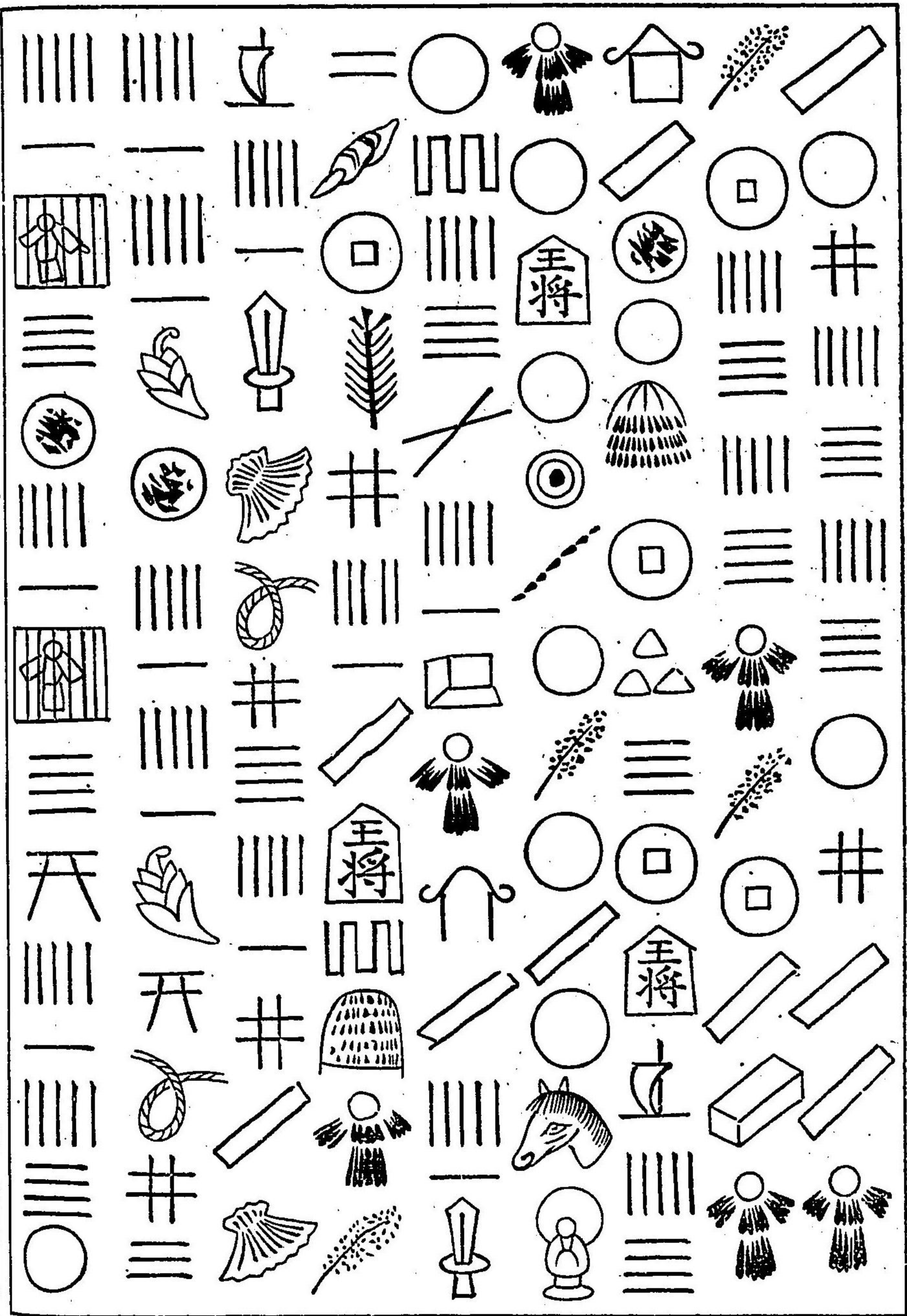
しけれども、病身なりとて不縁し歸りて、其後は尼になりて、此庵に住る。段々少食に成り、後には一月に二三度は少し食すればよしといひ、其後は段々に不食して數月の間に少し食することになりて、近き頃は絶えて食せざるやうに成れり、唯折々少しつゝ湯を呑みたり、かくのごとく斷食なれども、身體格別につかるゝ事もなく、近き年も信州善光寺に參詣せし數十日の旅行に、一飯も食せずして歩行も相應にして、無難に歸庵せり、其心より強つとめて斷食の行をするにもあらざれども、自然にかくのごとくなれば、人皆不思議に思ひて信仰し、參詣することとなり、怪敷事を行ふて人民を迷す人なりやとて、官よりも疑ひかゝりて、吟味の事もありしかど、唯病氣ゆゑのごとくなれば、餘義なしとて、そのまゝにあるなり。塘雨あやしみて余に語れり、この病昔の醫書には見えざる事なれども、近き年は世間に多き病なり。香川子も此病を論じて彼家にては新に不食病と名付たり、余も數人を療せしかど、しかと手際よく癒たることなし。婦人に多くあり、男子にも一兩人を見たり、婦人は人に嫁して出産にてもする事あれば、其一兩年は常のごとく食して、數年の後はまた不食す。男子にても婦人にては、此病の中に何ぞ外の病の傷寒、時疫、利疾等のごとく死生にもかゝりは

る程の大病を煩らひて、其癒かゝりの時には必よく食するものなり。病後一年も過て、氣力常のごとくに復すれば、又漸々に不食に成るものなり。此病ははじめは米穀を忌嫌ひ、かき餅或は豆腐、或は蕎麥等のごときものばかりを少しつゝ食し、或は酒などばかりを呑居て、漸々に何も食せざるやうに成るものなり。怪しむに足らず、又一生涯食はよくしなから、糞せざる人もあり、其外奇病、怪症、天下の内には種々の事ありて、余も見及び聞及べり、是は我本業の事にて、第一に心を用ゐしことなれば、別に病ひの事にかゝりし事ばかりの珍奇のこのみを書集て、醫話と名付て數卷となせり。此一事は塘雨物語りて、其書集し書にも載たれば、こゝにはしるせしなり。然れどもかゝる奇怪のことには、多くは姦民の人を迷はして金銀をむさぼることあり、十に八九は信じかたき事なり。むかしもいつの御宇にかや、一人の優婆塞斷食して佛道を修行し、奇異の靈驗ありと、備前國より奏聞す。帝奇特に思召れ、則召上せて神泉苑に住せしむ。洛中洛外の男女貴賤群集して、信仰參詣す。數日の後は諸國よりも追々に馳登りて、參詣するに、其所願成就せずといふことなし。効驗天下に聞えて、上み王公より下庶民に至るまで尊信せずといふことなし。然るに或人ためし見て、彼上人こそ夜ふ





メクラシキキョウ
盲心經



田向



右のことくなり然れども彼地の方言あるゆゑ繪にては甚合點し難き事多し。
 注解あり。

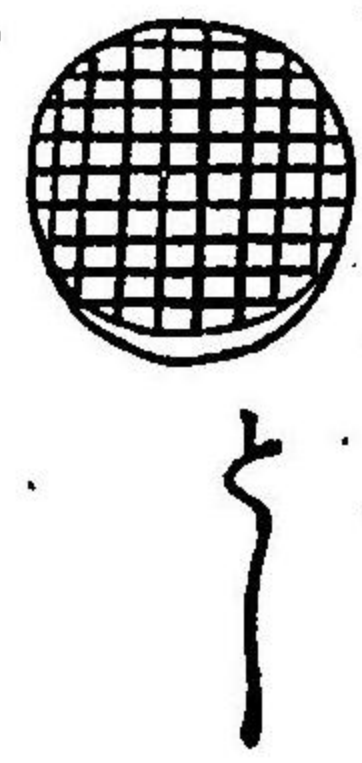
注解



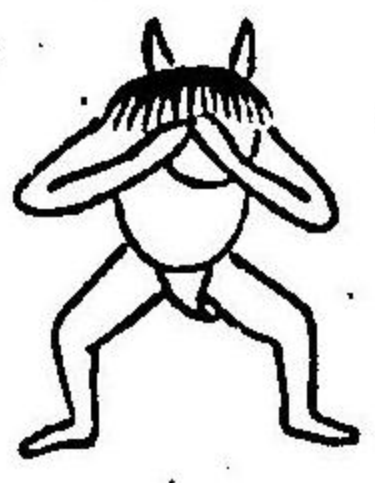
○東
開 歳徳之
け方を向いて
本成不切



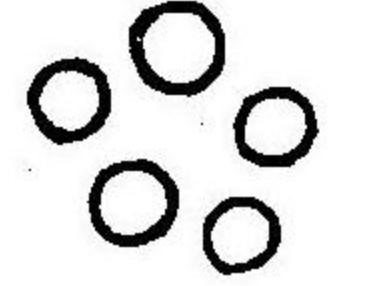
卯



と



節分



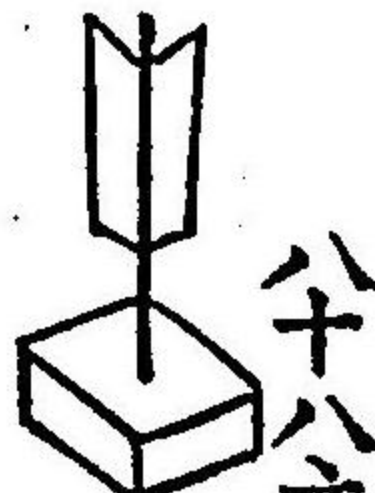
彼岸



社日



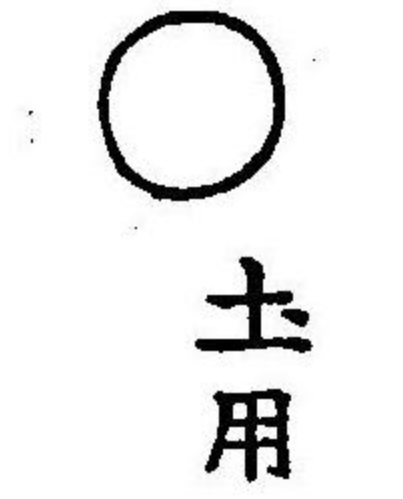
庚申



十八夜



八專



土用



地火

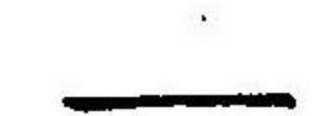


種マキヨシ



朔日

正月小



朔日



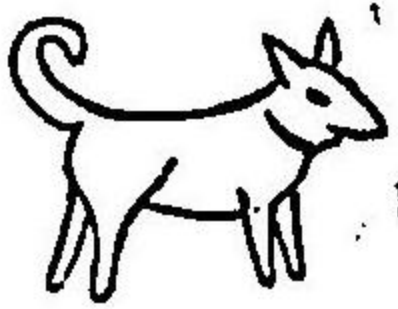
五日



九日

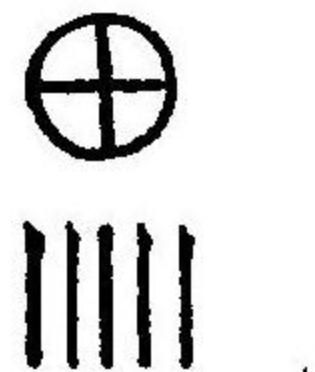


十日

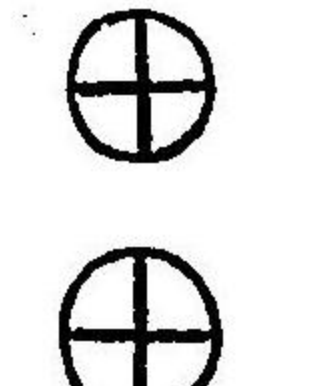


朔日

二月大

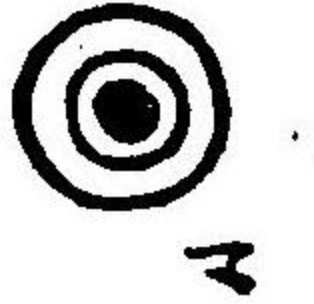


十五日

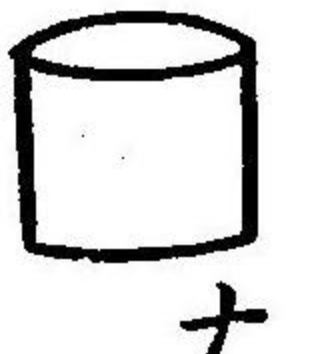


二十日

心經注解



眼心



カワ



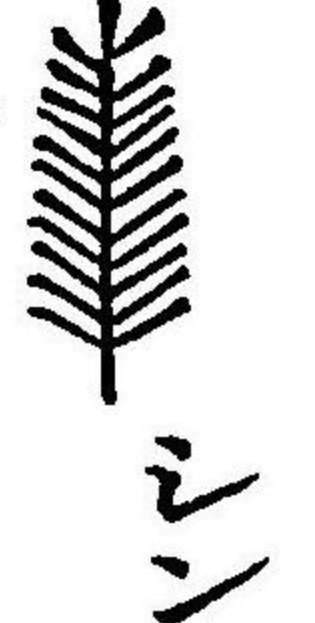
般若



孕



田



キヤウ

行人如此よと持た云



棺



鋸ナリ

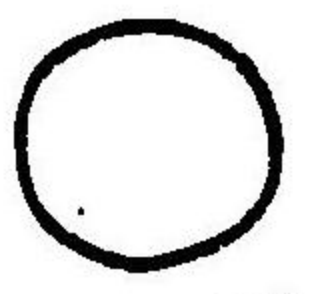
開



妻居



焼焚



ヤカ又焚



僧



クミト云草アリ

より龍飛崎に至る
沿岸にあり陸奥國
○田名部 陸奥國
下北郡斗南半嶋に
あり
○チコバ、チ、マ
等、チコバは奥邊
なり、チ、マは奥邊
間、シリヤは奥邊
半嶋の沿岸にあり
○提督紀安寺持隆
國久志郡安寺持隆
なる土地ありて其
處の土人文字を其
いふる故に昔年を
收納する由見な
たり、其寫したる
類なり

○田山村 陸中國
二戸郡にあり、こ
れ五十里にふは七
八十里にふは七
何十里にふは七
○結繩 文字なき
時代には結繩なき
れに代へ意を通ふ
なり

○天明丙午 是天
明六年なり 越後國
○平林 越後國
川を距る二里
二五町、村上
距る二里三十
町餘
○村上 越後國
岩船郡にありて内
藤氏の舊城市なり
○猿澤 越後國
岩船郡にありて村
上を距る二里十三
町餘
○彌町 越後國
同郡にあり、猿澤
驛を去る一里
十九町餘
○彌町 同國同
郡にして彌町を距
る二里三十四
町餘

○九州の山中云々
見るべし

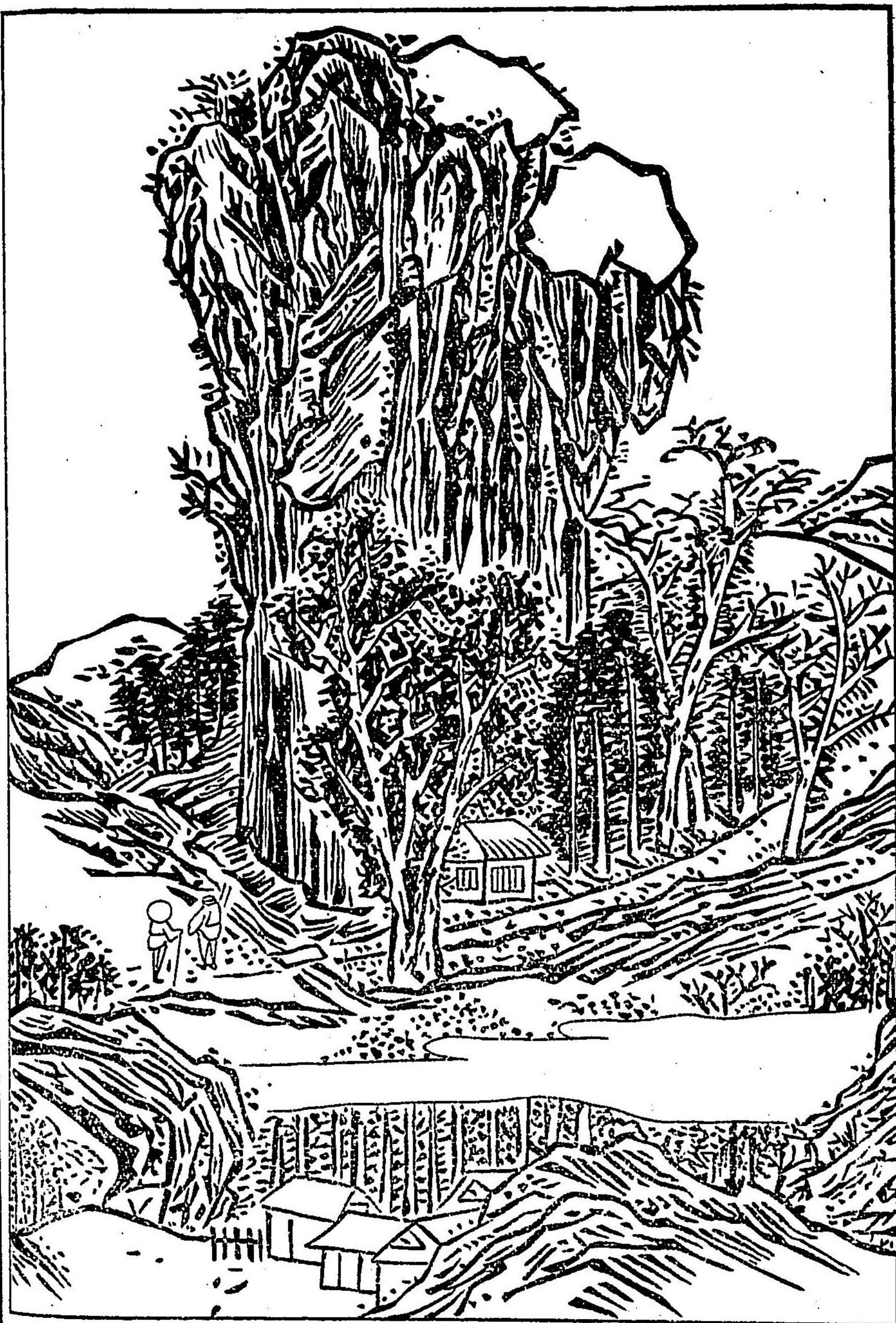
摩訶般若波羅密多心經觀自在菩薩行深般若波羅密多時照見五蘊皆空度一切
苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是
諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行色無眼耳鼻舌身
意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無明亦無無明盡乃至無老死亦無老
死盡無苦集滅道無智亦無得以無所得故菩提薩埵依般若波羅密多故心無罣礙
無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅密多故得
阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅密多是大神咒大明咒是無等等咒能除一切
苦眞實不虛故說般若波羅密多咒即說咒曰
羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩薩薩婆訶
般若心經

右心經の本文なり、引合せて讀べし。是等の事を用ひて假名文字も、いまたしら
ざる所は南部盛岡の城下より七八十里も北西にあたりたる田山村杯いへる
極山中の邊鄙なる、誠に古の結繩の約ともいふべし。蝦夷地も只今に文字無く、
木に刻を付て覺印とするとかや、是等の事にて思へば、西國と東國との文華の
西より開けたりと見ゆ。

葡萄嶺雪に歩す

天明丙午三月十八日、余越後國平林といふ所を立出、早朝少し雪降る、夫れより
二里餘にて村上の城下に至る。此所の問屋にて、是より馬を借らんと云に、是よ
り先は雪深く馬足立難しといひて、馬を出さず。三月末の事なれば、いかに雪國
なればとて、馬足の立がたき程の事はあらじ、是は人馬不自由なる故、かくはい
ふなるべしと疑ひなからせんかたなく歩み行に、村上より壹里猿澤の驛の邊
既に雪多し、それより又壹里鹽の町といふ驛にて中食するに、其家の老婆いふ
には、是より先は雪甚深くしてたやすくは行かたし、今宵は此所に宿したまへ
といふ。養軒顔を見合せて、いまだ日中にも至らざるに、宿せよといふ。老婆の、此
家にとめひと思ひていふなるべし、殊に天氣も晴たり、此先の葡萄の驛迄は纒
に貳里の道なれば、八ッ過る頃迄には行着べしとあざ笑ひて出たるに、誠に老

松堂藤雅則寫



○三馬屋と稱す
奥羽奇跡名所鑑に
云、三馬屋岩、義
經乘馬三匹、岩ノ
洞ニ建置故、所ノ
名トスル由、甲岩
神明宮、觀音堂、東
是ヨリ國無シ、東
國ノ果也
十二頁に註したり

○チコベ 奥戸北
かく、陸奥國下北
郡に屬し、斗南半
島の西岸にありて
大間より二里

の上に置いて順風を祈りしに、忽風かはり、恙なく松前の地に渡り給ひぬ。其像今に此所の寺にありて、義經の風祈りの觀音といふ。又波打際に大なる岩ありて、馬屋のごとく、穴三つ並べり、是義經の馬を立給ひし所となり、是によりて此地を三馬屋と稱する。此所より松前へ海上十里なり、此三馬屋の西北に當りて、タツビとて突出たる山あり、是より七里なり。されども松前への渡海は皆三馬屋より渡るなり、此渡りたやすからず、海中に別に大河のごとく漲り流る潮筋三筋あり、南をタツビの汐といふ、其次を中の汐と云、北を白神の汐と云、皆幅は綫なれども、其流甚急にして、汐先きの勢い五十里に及へり、晝夜とも常に西北より東南へ落て、サシ引往來なく、あたかも海中に三つの大瀧をかけたるがごとし、下の方松前の箱館と南部のヲコベの間の海にては、其汐合して一筋と成り、東へ落るゆゑ、いよゝ急なり。松前三馬屋の前の海底には、大なる巖あるゆゑ、其汐三つにわかるゝといふ。松前へ渡る船は至極の順風の強時を見合せて帆を十分に張り、伴の汐の所に至れば、むしろ杯を海中へ投入て、其ひまに矢を射ることく、横に乗切事なりとぞ。少しにても風たゆむ時は、此汐に押落さるゝなり、もし落さるゝ時は、五十里程またゝく間に流れ下りて、大海へ出

○サイ 佐井さか
く、陸奥國下北郡
に屬し、斗南半島の
西岸、奥戸の南に
あり

○村上 本書百二
十三頁に註したり

て汐の勢ひ少しゆるき所に至りて、船をどゞむ五十里より前方にて船を留る事は人力にては及ばずとなり、其汐は初にもいへることく、常に西より東へ落るのみにて、其理解しがたき事なり。かくのごとき所ゆゑ、我も松前へ渡らんと、三馬屋にしばし逗留せしかば、順風なくして得渡らすして歸りぬ。毎日順風なる事もあり、又二十日三十日も順風なき事もあり、それゆゑに反つて此渡海にては昔より難船なしと云。南部の田名部のサイ、或はヲコベの邊より、松前の箱館邊は甚近くして、天氣よければ海を隔て、衣類のはしてあるもみゆると云。南部のサイ、ヲコベの邊は、三馬屋などよりも大に北東へ出たる地なり、三馬屋より、北の方に藍のごとき山々遙にみゆる、是蝦夷地の山といふ、又田名部のヲコベの邊の山なりといふ、其邊實に日本の東北の限りなれども、溲にあらざる故、他國の人は名をだにしらず。

狐の義理

越後村上の近在に、百姓夫婦に娘三人持てり、天明〇巳年の事なりし由、家内に鼠荒て物をそこないければ、マチンを飯にまじへ、鼠に伺ひ、貳三疋も取りて、庭先



○天明巳年 天明
五年なり マチン 番木寇
の實なり

に捨たりしに其夜近所の狐の子來りて彼鼠を食たるに、マチンを與へたる鼠
なれば狐も其毒にわたりて死たり親狐其家のあるしを大に恨み姉娘に取付
て色々とうらみ口ばしり數日なやみてつひに死せり又其次の娘にとり付て
只一月ばかりの間に三人の娘死しぬれば父母甚歎き悲しみ其夜庭先へ立出
ていひけるは鼠を捨たるは汝か子にわたへ殺さんとの事にはわらざるに汝
か子むさぼり食ひて死したり是元來汝か子のわやまりなるを此方のしはさ
のやうに心得此方の愛子三人までを取殺すとはいかなる事や畜生とは云
なからわまりなる事かなど恨かこちけるに彼親狐此道理につまりしにや其
翌晚庭先に老狐貳疋死し居たり百姓夫婦是を見て昨夜此方より恨をいひし
道理にせめられかくみづから死したりと見えたり不便のわざなりとなげき
つひにそれより無常を觀じ夫婦とも剃髮し田地を賣り家業を捨て四國西國
へ順禮に出たり此春其者此邊へも來りしと越後所々其はなしありけるまゝ
書付侍る。

駿河名

○森岡 盛岡なり

奥州南部の地は日本東北の極りゆる殊に野鄙なり然れども其人甚質朴にし
て又甚神佛を信ず就中伊勢太神宮を深く信じいかなる貧しきものも男女と
も参宮せざる者なし余森岡近所にて馬に乗しに其馬かたの物語に我祖父代
々駿河と名付といふ余も驚きて馬かた杯をする身の父のいかなればかゝる
國名を名乗る事そ御身の父祖はいかなる家筋の人にやと問ひしに馬かた答
へて此名には深き由來こそ侍れ某が祖父参宮せしとき道すがら諸國の景色
土風を見及びけるに其中に駿河國程よきはなしと思ひけるが歸りての後も
猶彼國ゆかしく覺へけるまゝみづからの名を駿河と付て一生を終ぬ我父も
亦其父の名なれば同じく駿河と名乗りぬ某も又駿河と名乗べきを在所の庄
屋わまり大なる名なりとていなみけるまゝ某ばかり又助と申なりといへり
余も覺えず馬上に笑ひを催せり誠に是等の事にも彼地の質朴なること思ひ
やりぬへし。

三本木臺

夫南部の地は廣大無邊にして何れの國といへども此地の廣さに比すべき所

○三本木産 陸奥
國上北郡三本木村
にあり、東西八里、
南北三里十八町餘
の原なり

○八幸田山 八甲
田山なり、本番三
十八頁に見ゆ

○岩鷲山 岩手山
のこさなり、陸奥
國手郡の西北隅
にあり、奥州中有
名の高山にして高
さ二千〇五十尺あ
り、一ノ戸、陸中
二ノ戸、陸奥、陸
羽、沼宮内、陸奥
國、岩手郡に屬し、
陸奥國の北方、川
口の北にあり

○屠龍工 陸奥
云、奥州南部に戸
より九の戸、一の戸
あり、戸の事なるは
皆民戸の事なるは
あまに、南部なるは
あまに、奥なるは
あまに、野原の
原にて、又人郷の
あるか、津輕より
蝦夷の方へむけて
九の戸までありし
なり

○錦木の古跡 陸
奥國上北郡野邊地
村の中にあリ、こ
ひ久栗坂にあり、東
村久栗坂にあり、東
云、一無故人が東

なし、誠に七の戸邊に三本木産といふ野原あり、只平々たる芝原にて、四方目に
さばるものなし、此原東西凡二日路、南北半日路程ありと云、其間に人家もなく、
樹木も一本も見えず、實に無益の野原なり、雪中には此邊の人といへども、四方
に目印なければ方角知れず、五七日も往來やむ事ありとかや、此外にも野邊地
といふ所より七の戸迄來るにも、五十丁道四里半ありて、東西は猶廣し、此所も
只一面の芝原なり、此原は少し高ければ四方の山々見ゆる。西に八〇幸田山あ
り、西南には十三四里を隔て、三の戸嶽見ゆ、東南は廿里計を隔だて、八の戸
嶽見ゆ、又遙の南五十里隔て、盛岡の岩鷲山見ゆ、かくのこく四方豁然とし
て數百里一望に歸し、廣遠なると大海を望がごとし、右岩鷲山見ゆるにて、其地
の廣平なると、岩鷲山の高さを思ふべし、又一ノ戸より沼宮内まで一驛の間道
中記にしるす所七里なり、か様に宿より宿へへだたり、人馬の糞無き所、他の國
にはあらず、全體此邊人民甚少し、野邊地より北を田名部といふ、田名部の地は
高五千石のよし、然るに田名部の地の北海へ出張たること五十里計もあるよ
し、是にても中國、西國の一ヶ國の地面よりも廣し、然るに其高峻に五千石と云、
是にて人民の少さを知るへし、總て南部の地は海廣く山深く平地も右に云こ

とく廣莫なれば新に開きだにせは、上々の田畑幾千百萬石を得へし、只極邊土
ゆゑ人民みたずして、當時纔に十二萬石の作と定られたり、しかも其土地は甚
肥たり、只耕作の人なきを惜むべし、又南部の地に、南より段々一ノ戸、三ノ戸、五
ノ戸、七ノ戸、八ノ戸、九ノ戸、野邊地とて戸の字の付たる地多し、戸の字を皆へと
讀也、皆三里、五里、或は七八里を隔て山に據り、川を受て要害の地なり、多くは城
跡と見ゆ、今にても戸の字の付たる所は皆町作りにて賑なり、往古蝦夷を防し
關所木戸なりと覺ゆ、それゆゑ今に至りても猶其名の残りたるなるべし、其内
野邊地といふは北の終りなり、又南部の地は今も六丁を一里と云、余初め宿よ
り宿の間を尋るに、或は廿五里、三十二里杯いひしに驚しが、後には馴て常に成
たり、道平なる所なれば、馬に乗りて道をいそぎし事ありしか、南部の地にては
一日に七八十里、又は百里も徑行せし事ありき、仙臺領津輕領も南部に近き地
は、たゞ六丁を壹里と云、六十丁を大道壹里と云、其地の人に里數を尋るに、其人
大道か小道かといひて幾里ありと答ふ、惣て古風なる事多し。

錦木

りにをどづれしかば、養軒矢立取出し、

相携千里遠京畿、

旅館夜深燈影微、

窓外杜鵑聲切々、

請君細聽不如歸、

○南時集に云
邊民問杜鵑
紅城五月花
更有千影飛
更頻解人意
聲々不如歸

養軒もどより文字の才乏しく、殊に詩歌の道はいまだ學ひもせず、されど實境に在りて實情を述るに、余も是を吟して覺えず、悵然として是より歸をいそぐ事とはなりぬ、初家を出んとするとき、門生子皆従んと請ふ、然れども召具するには其人にあらざれば難儀に及ぶ事なり、第一大勢は悪しし、一人に限るべし、扱數百千里の行程なれば、心弱き者、足弱き者、多病の者、皆あしし、辛苦をいとぶ者あしし、大酒する者あしし、短慮なる者あしし、其父母愛に過る者あしし、其主許さるる者あしし、是等の事をゑらめは、具すへき者甚得難し、西遊の時は越中より來り居し文藏といふ者を具す、此度は日向より來り居し養軒を具せり、此養軒は余ら西遊せし時、肥後の球摩にてあるしとせし、青井信濃守の家に、儒學修行の爲に來り居りしに、五十日か間同居せしかば、其時醫の術を少し傳へき、余か青井を辭し去る時、養軒從ひ來らんとせしかども、父日向國にありていまだ漫遊の事を乞はず、其主君東都にいまして他邦に移る事を願はず、君父に不

請して師に従ふの道なしといひしに、理に伏して肥後に残り留れり、其後養軒日向に歸り、此事を父に語り、殘念なりといひしかば、父玄誠怒りて、汝いさみなしといふべし、好事は得難ふして、失ひやすし、其時直に従ひて九州にも四國にも押渡り、稽古の功を積ん事こそ、老父が悦ぶ事なれ、只一封の書をたに送らば、何ぞ我許しを得ん、主君へのいとまは老人よく取成して願ひなは、肥後に行たるも、四國に渡るも、主君のいとまの出し事は、同し事なれば、なほ相濟まざる事の有べきよしなき事を思ひ過し、時におくれし事かへすくもいさみなき事なりと、強くしかれり、其故又其次の年に至り、再び遊學のいとまを願ひ、京師に登りて余に従ひしなり、されば今度も此養軒を撰める事、其父の詞の勇なるを感し、且は養軒は生れ付、右の注文によく叶へるを以て具せしなり、誠に其父の詞のごとく、物學ふ事は、増穂の薄のごとくならざれば、成就し難きものなり、されど、其父既に七十歳に餘り、子としては只一人の養軒を修行の爲には、おのれが愛を割て、師に千里外に従はしむる、其志人の親たる者のよき手本なり、眞の子を愛するといふへし、さればこそ、此度も東遊の事を日向へ申送りし計にて、其許をまたすして發しぬ、それより東北のこらす遊歴して、東都まで歸り着ぬる

日は、我身の事よりも先養軒が旅中病る事もなくて恙なく従ひ歸りしを嬉しくぞ思ひし。

東遊記後編卷之二終

東遊記後編卷之三

四五六谷

○四五六谷 四五
六は蓋し雙六を誤
れるならん、飛驒
國吉城郡雙六村に
あり
○舟津 飛驒國吉
城郡にあり

四五〇谷は、越中飛驒信濃三國の間へ入り込る谷なり、富山へ落る神通川を逆上り、又其支流を尋てのほるに、甚深遠にして其奥を究る者なし、近き年、飛州舟津の人、兩人此谷の奥を究んとて、三日の糧を用意して、段々川にそひて入りしに、食も乏しくなりぬれば、魚を釣り食ふて、猶數日の間尋入りしに、ふと伴ひし者の魚を釣り居る顔を見やりたるに、異形の化物なり、大に驚きて聲をかけたるに、魚を釣り居たる者も驚きて、ふりかへり見るに、其呼たる者の顔亦異形に變して、恐しさいはんかたなした。がひにかくみゆるからは、此地に變こそ有るらめとて、いそぎ逃歸れり、遙逃出て、たがひに顔を見るに、何の變もなく、常々のごとくなれば、此奥こそ山神の住所ならめ、人の入る事を忌嫌ひて、かゝる變をあらはせしならんと恐れて、其後は奥深く入る者なしとなり、此事を其頃語り合ひしに、飛驒の高山の人、其座に在りていふ様、それは山神の變にはあらず、山と谷との日受によりて、人の顔異形に見ゆるものなり、飛州の中に人の往來

する谷邊に、人の顔長くみゆる所あり、其谷をしはし行過れば顔色常のごとし、此道を通り馴ざる人は、大に驚くことなれども、所の人は常しくにみなれてあやしむ事なしと云へり、外の國にては、いまた聞及はず、いと珍敷事なり。

齋藤五郎兵衛

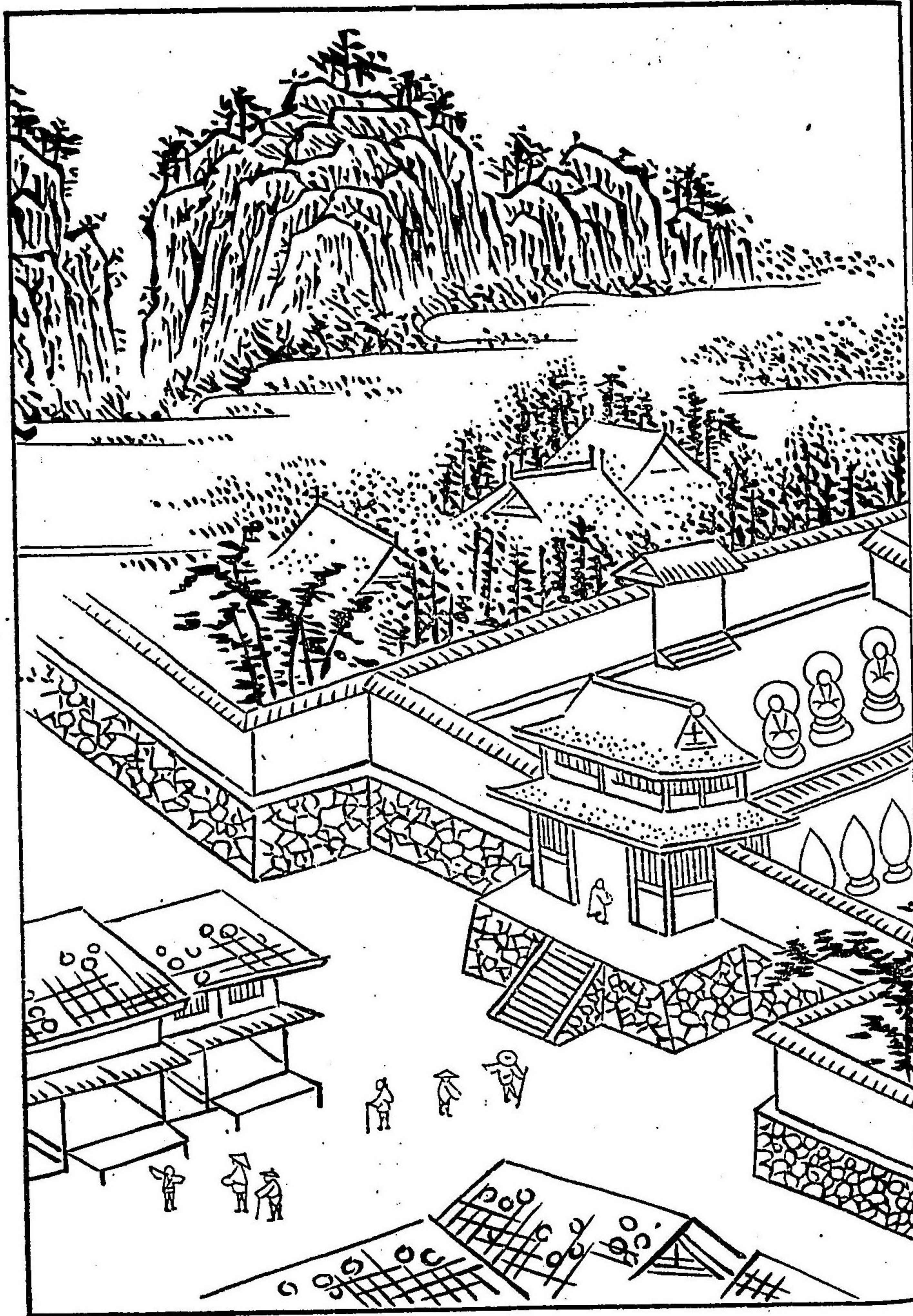
越前國敦賀より西北に當りて壹里斗常宮參詣の道に繩間村といふ有り、海邊にて多くは皆漁家なり、此村の庄屋を齋藤五郎兵衛といふ、此家は齋藤別當實盛が生れし家本なりとぞ、其時より今に代々家相續して齋藤五郎兵衛と名乗、家柄なれば所の庄屋を勤て、實盛が遺物等今に多く所持せりと云、誠に邊鄙の百姓には浮沈盛衰なく、數百年の家を保てる者多し、余も常宮に參詣せし時、彼家をも尋て實盛が舊物も一見したく思ひしかども、常宮の歸りは、夜に入りて、其事と、のはず過たり、あまり邊土ゆゑ、此名をしれる人たにもなし、埋れ居るも本意なき事なり。

北極星

北極星出地の高下によりて、地球の南北を知る事なり、地上にて直直に貳拾五里程を隔つる時は、天にて壹度を違ふ故に、北極星の度数を知れば、居なから國の南北をしり、又國の寒暖を知る醫者も、國々の氣候をしらざれば、其國の陰陽の變化を盡さず、故に疾病をも察する事あたはず、扱古人天學に精しき人、萬國の度数をしるし置、又日本にては諸國の度数詳にしるせるものあり、余も漫遊のついで、猶みつかから北極の度数を測試て、後日の考の一助とせんと、旅中にても用ゆへき測量の器を新に工夫し造り出して携へ行、國々にて測り見しに、先越中富山にて見る所、北極星地を出る事三十六度半強なり、出羽國秋田四十度半なり、奥州津輕、碓氷關四十一度四分なり、同青森四十一度七分なり、同三馬屋四十二度二分なり、南部、盛岡の四里北に遊民と云所あり、此所四拾度七分なり、殊に三馬屋は日本極北の地なれば、別而丁寧精密に測りて分厘を不違所、四拾貳度貳分なり、猶南部地の佐井、ヲコへの島は、其鼻大に北に出たれば、四拾三度のにも至るべし、其地に至り得されば、測らず、誠に津輕地は寒氣甚敷、海濱皆稊地の砂漠に似たるも、むべなり、唐土の北京も四拾度程の地なれば、其砂漠も四拾貳三度の内外なるべし、又日本にて極南の地は大隅國佐田岬なり、是三十壹度

○遊民 陸中國、遊民と云所あり、此所四拾度七分なり、殊に三馬屋は日本極北の地なれば、別而丁寧精密に測りて分厘を不違所、四拾貳度貳分なり、猶南部地の佐井、ヲコへの島は、其鼻大に北に出たれば、四拾三度のにも至るべし、其地に至り得されば、測らず、誠に津輕地は寒氣甚敷、海濱皆稊地の砂漠に似たるも、むべなり、唐土の北京も四拾度程の地なれば、其砂漠も四拾貳三度の内外なるべし、又日本にて極南の地は大隅國佐田岬なり、是三十壹度

○佐田岬 上編三十五頁を見よ



用なり、今着替を賣りて外へ出る事ならずば、櫛も無用なり、かんざしも無用なり、無用の物には心も残らず候へは、是れをも賣拂ひなば、又餘程の人をも救ふべしとて、つひに皆々賣て救ひぬ。其娘十二歳に成りけるが、同し年頃の小娘、餓つかれ、食を乞ひて門に立しに、其體誠にあはれにて、餘寒の嵐烈しければ、衣服ゆたかなるさへ堪かたさに、小娘はやうく解物のひとへ一ツを身にまとい、振ひこいへたる有様、母親見かねて我娘を呼ひ、其方は綿入二ツを重ねてあたたかに着たるが、おの子は誠に不便なる有様なり、年の程も同し位なれば、衣服も程よかるべし、最早段々暖氣にも成事なれば、あまり寒からずは、其綿入一ツぬきて、おの小娘にとらせまじやといへは、娘心よげにとくしんして、上に着たるよき方の綿入を與へたり。父母ともに涙を流して悦べりとぞ。又鶴岡の町はづれに沙塚といふ所あり、此沙塚に道心者あり、禪宗なるが、道徳も學問もあるとて、是まで年來大地の住職をも方々よりすゝめしかど、皆辭退して沙塚に小き草庵を結び、毎日たくはつして其日を過し、衣類は木綿より外は着ず、古び垢付は信者より新に作りて與ふるに、是迄着せしふるき衣服は、すなはち乞食非人に與へて、一ツも別に貯ふるとなし、其名をしれる人なくて、皆只沙塚の和尚

どのみ呼來れる。此和尚、彼饑饉の時、鶴岡の町々、其外在々にも、富る家にはみづから行て、かゝる折こそ、慈悲を加へ給へとて、頻りに勸化し、晝夜かけめぐり、もらい來れる程に、毎日くゝ餓人を救ひけるに、兼て此和尚を信仰の人、追々加勢して世話せり。始終餓人に與へ施せしものをつもり見るに、凡米百八十俵に金六十兩を此和尚の力にて施しける。此和尚常くゝは人に物を乞事なく、此日限の事のみして明日の貯もせず、法儀堅固の僧なれば、諸人ともに信仰歸依して、皆々多くの米錢を歸附して、餓人を救はせける。此二事、鶴岡より酒田へ下る川舟の乗合にて、鶴岡の人々口々に話して稱美しければ、矢立の墨にて書付歸れり。誠に鶴岡は莊内と稱して、米穀澤山の國にして、元來大富國なり、富るか故に人の心も温和にて、かゝる仁慈の事も多かりきと覺えし。

東遊記後編卷之三終

東遊記後編卷之四

熊野御前

東海道筋天龍川の東岸に池田といふ所あり。此所は熊野御前の古郷なり。傳へ云、熊野は池田の長が娘なりと。そのむかし京に出て内大臣平宗盛に仕へけるに、池田に残れる熊野が母病重しと告こしければ、いとまを得て老母の病をとひたしと、頻に願ひしかど、宗盛の寵愛深かりしかば、猶も許さず。彼謠曲に作れるごとく、一日花見の酒宴に召具せられけるに、熊野は君の寵も花の盛もこゝろならで、かくなんよみける、いかにせむ都の春もおしけれと、なれし東の花やちるらん。宗盛此歌を聞て感に堪かね、其座よりいとまたびけり。熊野は數ならぬ女なりしかど、其至孝の名今に朽すして、其里に至れば、人をして昔をおもはしむ。さばかり盛なりし平家も、暫しの榮花にて跡かたもなし。纒に池田の里と天龍川の水のみ昔の條にて、富貴榮耀いづくにかある、只おしむべきは名にして、名の實は忠孝なり。

○池田 遠江國田原郡に屬す。遠江國風土記傳卷七に云、池田、昔所也。庄園也。庄及宿在河内、今住河東、近津波之茶店也。昔爲平家領地之時、宿長者湯谷之内大從上京住子内大臣右大將家宗盛、歸郷死、建湯谷寺、有母子之墓とあり。湯谷寺は行興寺といふ寺のこゝなり。○謠曲 熊野といふ謠曲にこのことを作たり。

羽州の鬼

出羽の國小佐川といふ所に至らんとする頃は、早申の刻も過つらんと覺へて、山の色もいとくらく、殊にきのふよりしめやかに雨降て、日影もさだかにはしれず。先の宿までは又三里もあれば、とても日の内にはいたり。がたからんや、されど雨中なれば、思ひの外に時刻移らぬ事もやあらんと疑ひて、行逢ける老夫に、先の宿迄ゆくに、日は暮まじやと問に、眉をひそめ、道をさへいそぎ、玉は、行付もし玉はんなれと見れば、遠國の人々にこそ、此程は此あたりに鬼出て人をとり食ふ。初は夜る斗なりしが、近き頃に成りては、白晝に出て、此道行かふ者は、人馬の差別なく、くはれざるはなし。是迄の道も鬼の出ぬる所なるに、くはれ玉はざりしは、運強き人々なり。是より先は殊さら鬼多し。旅するも命のありてこそ、何いそぎの用かは知らねども、日暮に及んで、行給んは危しと云。養軒も聞き笑ふ、いかに邊土に來ぬればとて、人を驚かすも程こそあらめ。鬼の人を取り食ふ杯は、昔嘶の草双紙などに有事にて三才の小兒も今の世には信せざる事なり。其鬼は青鬼か赤鬼か、虎の皮の幟鼻禪は古きや新きや、杯嘲り戯れつゝ、暫

○小佐川 羽後國沿て、街道の羽後國南にあり。郡の四町を隔るこゝ一里十餘

し来て猶時刻のおぼつかなければ、あやしのわら屋に入て、日有るうちにむかふの宿までゆき着へしやと問に、此あるともおどろきし體にて、旅の人は不敵の事を宣ふものかな、此先はかばかり鬼多きをいかにして無事に行過玉はんや、きのふも此里の八太郎くはれたり、けふも隣村の九郎助取られたり、あなこそろしといひて、時刻の事は答もせず、同じ様にも人をおどろかすものかなと笑ひて出つゝ、又人に問ふた、又鬼の事いふ、あやしくも猶おかしけれど、三人まで同じ様に恐れぬるに、何とやら誠しやかに成りて、養軒何とか思へる、詞もあやし、殊に日足もたけぬと見ゆ、雨猶そぼ降て、けしきも心細し、さのみ行さきいそぐべきにもあらず、人里に遠かりなば、せむかたも有まじ、猶くはしく尋問て、鬼の事いはば、今夜は此里に宿りなんといへば、養軒も同意して、それより家ごとに入りて尋問に、口々に鬼の事いふて舌を振はして恐る、扱はそらむとにあらじ、古郷を出て三百里に及べば、かゝる奇異の事にも逢事ぞ、さらば宿を求めど、あなたこなた宿をこひて、やう／＼六十に餘れる老婆と、二十四五計なる男と住る、家に宿りぬ、足す／＼きて圍爐裏によりて、木賃の飯をたき／＼も、又彼鬼の事尋れば、老婆恐れおの／＼さて、何事かかき付やうにいふ、邊土の女、其言葉一

○ウヤムヤの關
有耶無耶關
の西羽後國由利郡
沿岸街道にあり、小
佐川の北にあり

しはに聞取がたくて、何事をいふともしれず、さらば其鬼はいかなる形を額に角を見て腰に虎の皮のふんをせりやといへば、男かぶりをふりて、左様の者にはあらずと云、然らばいかなるものぞといへば、只犬のごとくにして、少し大なりと云、せい高く口大なりやと問へば、其ごとしと云、扱は狼にてはあらずやといふに、狼ともいふと聞しと答ふ、養軒顔を見合せ、扱は大かたならぬ恐れなかりといふに、先程よりの詞をも俄に誠に成りし心地して、おそろしき事いふはかりなし、段々くはしく聞に、此に小佐川の人も、六七人も喰殺され、きのふも此向ふのウヤムヤの關の者に飛かゝりしに、彼者強勇の男にして、ひしと組付一身の力を出して、つひに狼を組伏せたりしに、身に寸鐵も無れば、組伏せはふせながら、いかんともしがたし、やう／＼にかたはらの石をひろひ、其石を以て狼の頭をたゞき碎て殺しぬ、されど其身も數か所手負て、家に歸りて死せりなぞ、此間の事其恐ろしき限り取集ていふに、是は狼に病付て白晝にも數十疋出て、人を害するならん、我々禽獸の爲に此邊境に來りて命を失ん事、いか計口惜しき事なりと思ひめぐらせば、其夜は目もあはず、是より歸らんにも危し、行ん事も猶さらなり、此里に住はつべき身にあらず、盜ならば衣服をも與ふべし、

仇ならば智罽をも施すべし、いかにせむ異類の獸の爲に勇を振むと、誠に虎を手打にするのたぐひにして、志有る者のすべき事にあらず、されどさしあたりたる事にせんかたもなく、殊にあすのみに限らず、行先は連山波濤のごとく見ゆれば、あの中を越え行んに、いかなる此上の猛獸か出んと、あらぬ思ひを費して、程なく夜はあけぬ中、く打立べくもあらねば、件の男をよひて、此里に馬あらば貳疋かりて與へよ、貨錢はいとはじと、ひたすらに頼しに、駄賃馬は此あたりにはなし、杯と、しぶく、にいひつゝ、出行しが、程なく歸りて馬二疋しかくの賃にて、さきの宿迄かり來れり、其の上此近隣に秋田へ越ゆる商人兩人宿り居て、鬼に恐れ、是も馬貳疋をかりて居たりしが、そこたちの事をいひたれば、よき道連なり、同道して玉はらんやと、某に頼めりと云、扱はよき味方を得たり、此方よりこそ頼たきものをと、それより彼商人と申合せ、彼商人にこなた兩人、馬四疋に馬士四人、手ごと長き棒を携へ、鹿狩なんどに出る様に出立て、小うたうたひ連、大勢のいさはひにさゝめき出たれば、少しは安堵して、よべ思ひ煩ひし程にもあらず、されどもしや出來らんかと、四方に眼をくばり行過しに、運よくて無難に向ふの宿に付たり、關てゆるあたりにては、彼さきのふ石にてたゞさ

碎し狼の頭ばかり落残れり、其體は何方へ取去しや見へず、見るだに恐ろしき事なりき、誠に此道筋三里か程は人家もなく、高き芝原にて、細き道筋數々付り、病なくとも狼の出べき土地とぞ覺ゆ、猶其先の宿くも、彼商人と一組になり、皆々馬に打乗て、用心堅固にして行しに、五六里か程過しかば、鬼の沙汰もやみぬ、誠に人を取食ふものゆゑに、此あたりにては狼を鬼といふなるべし、古風なる事なり、程過て、今に至ればおかしき物語ともなりぬれど、其時の物おんと筆の及ぶ所にあらず。

松 島

五月八日、奥州松島見物のために、鹽竈の町杉坂といふ所の津國屋和助といへる旅館に宿す、あるじいふは、明日の松嶋御見物は幸の御友こそあれ、初より奥の座敷に泊りたまふは、禪僧にて四五人連なり、明日は舟かりて松嶋見物せんと宣ふ、同船して見物したまへといふ、それこそは能き連れなれ、旅の僧物語も珍らしからんと、楽しみ居たるに、奥の座敷僧にも似す振舞て、高聲に笑ひのしりけるに、初夜過る頃には、此町の妓婦四五人を召來りて、酒をも肉をも呑食

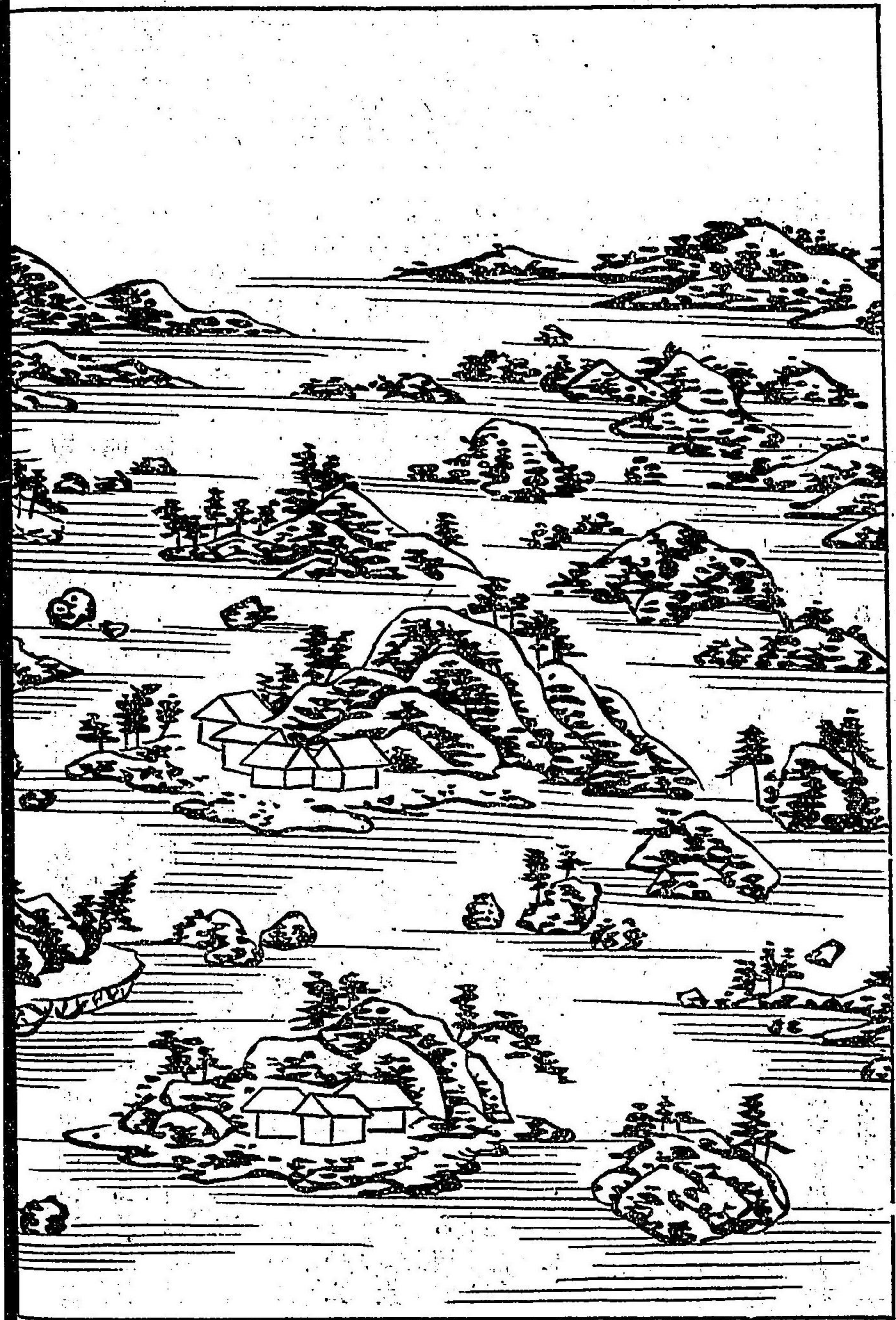
○松嶋 陰前國宮
城郡の東北海邊に
あり、鹽竈の北二
里餘、我國三景の
一と稱するこゝに
の知る所なり

東南經小汀、白沙、而松千、右、左、邊、屏風、島、陰、湖、翠、過、橋、入、幽、徑、滑、上、有、坐、禪、堂、傍、有、一、亭、號、把、不、住、軒、香、燭、之、居、名、在、昔、佛、上、人、之、此、地、乃、見、佛、上、人、之、故、松、而、植、塔、淨、園、遍、累、々、而、列、其、北、岸、有、宮、千、代、遺、跡、自、是、過、細、巡、而、有、泉、向、西、南、城、底、散、後、有、賴、賢、古、碑、其、地、也、老、松、五、六、株、海、風、吹、漸、斷、岸、數、千、切、江、波、沈、寂、其、北、活、也、稀、松、杉、寒、獨、集、非、凡、俗、塵、之、地、悽、愴、悲、哀、之、情、矣、○碑、封、內、風、土、記、卷、四、一、云、古、碑、一、高、一、丈、廣、三、尺、寸、五、分、厚、七、寸、文、倉、建、長、寺、而、相、州、文、和、銘、佛、尊、一、山、間、老、志、乃、御、志、在、御、嶋、島、四、住、共、備、

南、是、乃、其、門、人、匠、心、孤、運、者、請、行、實、州、之、碑、也、碑、首、有、與、碑、銘、併、序、三、字、其、銘、乃、草、書、一、碧、以、書、名、千、世、○半、消、滅、尤、可、惜、朝、心、さ、な、誰、の、吟、な、り、○片、心、さ、い、ふ、吟、な、り、○瑞、巖、寺、松、嶋、村、に、あり、封、内、風、土、記、に、あり、松、嶋、村、龍、高、城、松、嶋、色、香、龍、山、城、松、嶋、色、香、外、心、寺、末、寺、五、年、熱、和、帝、天、長、五、年、而、號、龍、山、延、福、寺、其、後、鎌、倉、北、條、來、千、木、州、松、嶋、村、身、前、與、禪、師、約、開、宗、改、入、爲、禪、林、以、法、身、禪、師、爲、開、長、九、年、命、門、君、伊、達、政、宗、命、造、景、之、事、同、十、四、年、三、月、賀、式、永、爲、伊、達、家、之、宗、廟、○眞、壁、平、四、郎、入、道

を見洩さじとするに、心のいとまなくして、十分の一もしるし得ず、八百八島有り云、誠に數百に餘れりと思ふ、鹽竈の千賀の浦より松島迄二里半の間、泉水のごとく、海亦甚深からず、五六尺或は七八尺計に見へて、底甚明なり。かくのごとく島の間皆入海なれば、風ありといへども、波立事なしといへり。此島々の松、皆赤色にして、枝皆下に垂れ、作れる松のごとし、故に其景色艶美にして、猛からず、扱舟を雄島に付て上り見るに、雄島頗る大也。此島は見佛禪師の座禪の地也、其堂宇今に連れり、島の南邊に高さ壹丈に餘れる碑有り、元僧寧一山、鎌倉建長寺に住持せし時、見佛禪師の爲に書する碑にして、字體は草書なり、苔封じて文字見へがたき所多し、世の人石摺にして珍重する石碑なり。其外、此雄島には芭蕉の朝な夕な、の吟をはしめ、俳諧者流の發句の碑、或は騷人の詩碑等甚多し、然れども此佳景に對すべき作は有ぬとも覺へず。扱雄島見めぐりて、大なる橋を渡り、他の島にのほり、又其島より橋にて松島に渡る。今松島と名付る所は、陸地にて、町家軒を並べたり、多くは皆旅館なり。松島の町耕作の地少ければ、農人もあらず、又此地は瑞巖寺の下にて、殺生禁制の所なれば、漁獵の者にもあらず、他の街道にあらざれば、商家にもあらず、大かたは只松島の景色遊覽の人を宿

して渡世とする事なり。瑞巖寺は町の西北にあり、禪宗にて大地也、開山は世に名高き眞壁平四郎入道なり。此松島の町よりは景色見えがたし、景色は只舟行の間なり。扱兼て仙臺の人のいひしには、松島に遊ぶ人は必富山に登るべし。松島の景は富山に留れりと聞しによりて、又富山に至る、東北に當りて、其道五十丁有り。富山と云は、觀音の靈場にて、田村將軍の開山なりと云。高さ十丁ばかりもありて、此邊にては第一の高山也。此山の絶頂の南邊に、富春山大仰寺といふ寺あり。此寺の書院の庭より東南の方を見れば、松島の全景一望の中に備る。大抵東西貳三里に南北六七里計とも見えて、八百八島連れる風景、繪に書る西湖の圖に甚似たり。遙に眼をめぐらせば、東洋限りもなく、誠に天下第一の絶景筆紙に盡すべきにあらず、人によりて松島は俗景なりと云も、あまりに奇麗にして、畫圖のごときゆゑにいふなるべし。余既に天下をめぐり盡して、名勝の地至らざる所も無きに、實に此松島の風景に比すべきもの、又他所に見る事なし。此庭に一生をもおへたき心ちすれど、千里外の旅の身さてあるべきにあらねば、親しき人に別るゝ心地して、寺を下り、又松島にかへり、松島より陸地をへて鹽竈の杉坂に歸る。松島と鹽竈との陸路は、山に隔られて、景色見えす、初思ひしは



漢文帝

○細川侯 熊本藩
主 細川重實のこ
に 細川重隆治大
銀に 重隆治大

奥州二本松邊より白川へ来るあたりの驛々、民家の戸口に漢孝文皇帝守護
と板行にしたる紙の札を張れり。扱も珍敷札かなと思ふより、心を留て其あた
りの家々を見るに、家ごとにあるにもあらねども、十軒目、廿軒目程には、ま
札をはれり。其家に立寄て、此札は何方の社より出る事にやと問ひしに、下野國
日光山邊より、例年、神主くばり來るといふ。されは何といふ社なりやと尋しか
ど、百姓の老婆にてくはしき事はしらずと云い、か成ゆゑにて文帝を祀れるに
や、社は何と名付け、何村の氏神なりや、聞まはしく覺えし、祭り來れるには外に
深き由來も有へけれど、何にもせよ、此文帝は唐土にても、世々の天子の中に三
王以後の聖天子とも呼れ給ふ仁慈深き君なれば、彼國には一しほにたふとひ
祀るべし、我日本にまて、勸請して、民家の戸々に守り札に張れる事、仁徳の有難
き事を見るべし、又越前路を通し、頃、何れの地にてや、民家の戸ごとに、細川越中
守と小札に書て守札となしはれる所を見たり。細川侯は當時の大名なれど、
近き頃、其國政の勝れたる事、既に日本國中に聞えて、其名を書て守札とす。

戸隠山

○戸隠山 信濃國の北の方よりて、越後へ出る方あり、信州は總体山國
にて、連山波濤のごとくなるに、此戸隠山は基を別にして、京近邊にていは、生
駒山を望むがごとくなる山なり。手力雄命を祭れりといふ。天照太神、天の岩戸
にこもらせ給ひける時、衆神寄給ひて、神樂を奏し給ひければ、太神岩戸を少し
内より開き給ひて、さしのぞかせ給ふ所を、手力雄命岩戸の戸を引放ち、抛捨給
ひしが、此戸隠山に落たり。それより戸を隠したる山といふことにて、かく名付
たりとぞ、世俗のいひ傳へなり。扱此山に大なる洞穴あり、其の穴の中に大蛇あ
り、九頭龍權現と名付て、此山の鎮守の神なりとぞ、頭九ツ有る龍にて、神變不思
議の靈神なり、社人毎日、穴の中に神供を備へて、其まゝ、うしろをかへり見ず、退
き歸る事なり。翌日は、其神供の物一つも残らず無しとなり、少しにても火のけ
がれたる食は、其まゝにて食し給はずといふ、又甚梨を好み給ふ、誰にても願心
ある人、梨を穴の内へ入れて、祈念するに、早其間に穴の中に、梨を咬み食ふ音
聞ゆ、人皆恐れて、眼をふさぎ、つひに其形を見たる者は、あらず、諸の願望叶はず

